

FAIRY TAIL～滅竜魔導士『海竜』～

ジューゴ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

妖精の尻尾には『妖精の尻尾の双竜』と呼ばれる二人の滅竜魔道士がいる。

一人は皆ご存じナツ・ドラグニル。

もう一人は、『大海』の滅竜魔道士であるリオ・マーシャル。

少年はナツやギルドの仲間と共に多くの冒険を出会いをすることになる。

彼が成し遂げる偉業はどんなものになるのか。

文才がないため駄文になるかと思われませんがご了承ください。

目次

設定	1
始まりの冒険	
プロローグ	4
妖精の尻尾（フェアリーテイル）の魔導士たち	8
双竜と猿と牛	25
チーム結成！初めての依頼	42
潜入！エバルー屋敷！	55
魔導士VS傭兵	76
DEAR KABY	84
エピローグ〜帰り道	94
緋色の女魔導士	99

設定

リオ・マーシャル

性別 男

年齢 不詳

所属ギルド 妖精の尻尾

好きなもの 泥水を除く飲み物全般

嫌いなもの 乗り物全般

白に近い金髪が特徴の青年。(容姿と服装は【東京喰種】のリオを参考)

昔からナツとチームを組んでおり、コンビとして相性が良く、『双竜』とまで呼ばれるようになった。

心優しい性格で、妖精の尻尾フェアリーテイルの中でも数少ない常識人であるため、始末書三昧のマカロフにも頼りにされている。

失われた魔法《ロストマジック》の治癒魔法を有しているため評議会からも目を付けられており、依頼されることもたまにある。(それのおかげで妖精の尻尾の起こす問題にある程度目を瞑ってもらっている)。

ナツと同じように「ギルドの仲間たちは家族」という思いも人一倍であり、家族である仲間のためなら、どんな強大な敵にも諦めず立ち向かい、仲間を大事にしない者は誰彼問わず許さない。

《大海の滅竜魔法》

海竜の咆哮 口から水圧の高い水のブレス吐き出して攻撃する。

海竜の鉄拳 水を腕に纏って殴り付ける

海竜の鉤爪 高圧水流の水をまとった蹴り

海竜の真槍 手に水の槍を作り出して纏わせて貫く。

海竜の斬撃 手から長さ1mほどの高圧水流の剣を作り出し相手を切る。切れない物はない程の切れ味を誇る。

海竜の城郭 水で壁を作り、相手の攻撃を防ぐ。一部分を開けるこ

とも可能

海竜の断瀑 高圧の激流を相手に叩きつける。ナツの火竜の煌炎の海竜バージョン。

海竜の弾雨 水の塊を何発を放つ。

海竜の波蝕 両腕に水を纏ってなぎ払う。

海竜の激浪 全身に水を纏い、勢いをつけて体当たりを繰り返す。

ナツの火竜の劔角バージョン

《滅竜奥義》

水禍激流葬 「竜の鱗を砕き、竜の肝を潰し、その魂を狩り取る」と言われる魔法。高圧水流の水を纏った両腕を振るい、激流を伴った螺旋状の強烈な一撃を放つ大技。

水廉千刃谷 両腕と両足に高圧水流の水を纏って飛ばす斬撃の乱れ撃ち。乱発させた飛ぶ斬撃は、海を完全な水滴に分解してしまう程の猛烈な威力を発揮する。

《治癒魔法》

(クーラ) 回復魔法

(ダーリア) 酔い止め

(ギフト) 状態異常回復

(デイーリング) 状態異常耐性

(デイフイート) 防御力向上

(バイグリフ) 攻撃力向上

(ピオル) 俊敏力向上

ルナ

性別 メス

年齢 6歳

所属ギルド 妖精の尻尾

魔法 翼

好きなもの リオ、チーズケーキ

嫌いなもの 家族を侮辱する人

黄色のエクシード。リオと行動を共にしている。ハッピーとほぼ同時期に生まれたため、二人は兄妹のように仲がいい。

のんびりした性格をしている。

ラギアノス

水を操る蒼黒の竜。「大海の王」と呼ばれていた海竜。人間との共存を否定していたが、リオを拾ったことにより人間との対立を止めた。

始まりの冒険 プロローグ

魔法評議院ERA

「ウルティアよ、会議中に遊ぶのはやめなさい」

とある会議室に集まった評議院議長と9人の上級議員、その内の1人が水晶玉で遊ぶ女性に注意を促していた。

「だってヒマなんですもの。ね？ジークレイン様」

「お——ヒマだねえ。誰か問題でも起こしてくんねーかな」

しかし、女性は悪びれる様子もなく1人の男性に話しかけた。そしてその男性もまた今の状況に退屈しており、何かしら事件が起こらないかと期待していた。

「つ…慎みたまえ!!何でこんな若造どもが評議員になれたんじゃ!!」

「魔力が高エからさ、じじい」

「ぬう〜!!」

1人の議員がジークレインやウルティアの態度と言動に憤慨し、異論を唱えたがジークレインは毅然としており揶揄する始末だった。

「これ……双方黙らぬか」

そんな状況に対し、議長は場を納めて今回の議題を進めようとした。

「魔法界は常に問題が山積みなのじゃ。中でも早めに手を打っておきたい問題は……」

フェアリーテイル
妖精の尻尾のバカ共じゃ」

ファイオーレ王国。人口1,700万の永世中立国。

そこは魔法の世界。

魔法は普通に売買されており、人々の生活に根付いていた。

そして、その魔法を駆使して生業とする者たちがいる。

人々はそんな人たちを魔導士と呼んだ。

魔導士たちは様々なギルドに所属し、依頼に応じて仕事をする。

そういったギルドがファイオーレ王国には多数存在している。

そして、とある街マグノリアにはとある魔導士ギルドが存在している。

多くの伝説を生み出し、数奇な運命を何度も経験していったギルド。

その名も――

フェアリーテイル
妖精の尻尾

妖精の尻尾フェアリーテイルの屋根の上、そこに1人の男性が寝ていた。

中では相変わらず喧騒の声が絶えない。

(ま、それこそ妖精の尻尾フェアリーテイルっぽくていいんだけどね)

そう思い、今は比較的大人しいギルドを見る白に近い金髪にアメジスト色の瞳の少年——リオ・マーシャルは楽しげに頬を緩ませる。

そして何か物足りない感じがして、今は居ない少年の事を思い浮かべた。

(そういえばナツはハルジオンに行ってたっけ)

確か火竜が出たとかで、それがイグニールだと思い込んだナツがハッピーと共に探しに行っただはずだ。まあしばらくしたらイグニールのおじさんがいないことに気づいて帰ってくるだろう。それに自分もラギアノスのことだったら冷静でいられる自信がない。

「リオどうしたの？何か悩んでる顔してたけど」

可愛らしい声で喋る綺麗な黄色い毛色を持つメスの猫(名前はルナ)が羽を生やしてリオにいる屋根の上まで飛んできた。

「いや、ちよつとね。そろそろ、ナツとハッピーも噂がデマだと気づいて帰って来る頃だと思うからさ」

「そうかもね。お土産はチーズケーキがいいな」

「また魚かもよ?」

リオはちよつと呆れた感じで言う。

ハッピーは無類の魚好きでよく仕事先のお土産として魚を持って

帰ってくる。ルナとしてはチーズケーキの方がいいためちよつと困っていた。

そんな会話をしているとリオの耳にある音が集まってきた。

(この足音は……知らない足音もあるけどこれは……)

聞き知った足音に入り口の扉の方に目を向けるとリオは自然と微笑みを浮かべた。

「ようこそ妖精の尻尾フェアリーテイルへ!!」

「わあっ……!」

そこには見知った少年と一匹の空飛ぶネコ。そして初めて見る金髪の美少女が居た。

妖精の尻尾（フェアリーテイル）の魔導士たち

帰って来たナツとハッピー、そして金髪美少女。

（ハルジオンで見つけたのかな？）

リオは女の子を見てそう思った。妖精の尻尾フェアリーテイルにはモデルをやつてミラを筆頭に他のギルドと比べても綺麗な女性が多い。彼女も引けを取らないだろう。

そう思ったリオは屋根から飛び降りた。

「お帰りナツ、ハッピー」

「リオ！今帰ったぞー！」

「ナツ、ハッピーお帰り〜」

「あ、ルナ！ただいま〜！」

ハッピーはふわふわ浮いているルナを見つけると笑顔でルナの方まで飛んでいった。

「え？メスのハッピー？」

「ルナって言うの。よろしく〜」

「よ、よろしく」

まさかハッピーのような生き物にまた遭遇することになるとは思わなかった金髪美少女——ルーシイは意外と珍しくないのかしら、と首を傾げた。そこに

「2人とも、サラマンダー火竜の噂はデマだった？」

「あ！そうじゃねえか!!」

リオに火竜の噂について聞かれたナツは思い出した後、怒った様子でギルドの中に入っていった。

「えつと…あなたは？」

「加入希望者だよな？俺はリオ。とりあえず、よろしく」

「よ、よろしくお願ひしますリオさん」

「リオでいいよ。年も近いしね。とりあえず中に入って」

リオに中を案内されたルーシィーは人々が騒がしく、しかし楽しんで乱闘するのを見て感動した。

「てめえ！^{サラマンダー} 火竜の情報嘘だったじゃねえか!!」

「グホッ！」

新聞を読んでいた男が怒ったナツによつてひざ蹴りされた。ひざ蹴りされた男は吹っ飛んでテーブルを巻き込みながら落下する。

「てめえ、コラ！」

「あ、痛！ちよつと！」

ついでに巻き込まれた人たちも怒りで火が付いたのか周りの者達と喧嘩をし始める。

ようやく憧れていたギルドに来たのだ。たとえ喧嘩でもなんだが貴重なものを感じる。

ルーシィは、感激で立ち尽くしていた。

(凄い！私、本当に妖精の尻尾フェアリーテイルに来たんだ！)

「ナツが帰ってきたってえ!?おい、ナツ！この前のケリつけんぞ！」

「グレイ」

「あ？何だよりオ」

「服」

「うおっ！いつの間に！」

そう言つて慌てる、ちよつと、いやかなり脱ぎ癖の強い男——グレイ・フルバスター。

「全くこれだから品のない此処の男共は……嫌だよ」

そう言いながらも大樽を持ち上げて酒を飲む黒髪ウエーブの女性
——カナ・アルベローナ。

「くだらん」

「わっ」

「お、エルフマン」

リオとルーシイの後ろに立つ、巨漢の男——エルフマン・ストラウスが傲然と言い放つ。

「昼間っからピーピーギャーギャーガキじゃあるまいし……漢なら拳で語れええ!!」

「結局喧嘩なのね」

雄叫びをあげながら騒ぎの中に突っ込むエルフマン。だが。

「邪魔だ!」

「しかも玉砕!」

ナツとグレイによって一瞬で吹き飛ばされた。

「騒々しいな」

「あつ! 彼氏にしたい魔導士上位ランカーのロキ!」

「ああ、週ソラのやつ？」

「うんそれ！」

ルーシイが反応した直後、

「混ざってくるねえ〜」

「頑張つてえ〜♡」

(はい消えたー！)

ロキは側にいる女性に甘い言葉を言い残して喧嘩に参加した。

「ロキは普段からよくナンパしてるからね、女が近くにいっても不思議じゃないよ」

「な…何よこれ…まともな人いないの？」

「それが妖精フェアリーテイルの尻尾です(だよ〜)」

ルーシイの疑問にハッピーとルナはハモって答えた。

「あら？新人さん？」

そこに銀髪の美女である妖精フェアリーテイルの尻尾の従業員のミラジエーン・スト
ラウスがやって来た。

「あ、ミラ。この人新人のルーシイだつて」

「ど、どうも……つてミ、ミラジエーン!?ほ、本物だ〜！」

ルーシイが歓声をあげる。ミラジエーンはルーシイが愛読している『週刊ソーサラー』のグラビアを飾る魔導士で有名なので、ルーシイもよく知っているのだ。というより、憧れの人である。

「ふふ、ナツが帰って来たから早速ギルドが壊れそうね」

「すでに壊れてるけどね」

リオがボロボロになったギルドを見て苦笑いしながらツッコむ。
「ていうか…あれ、止めなくていいんですか？」

と、素に戻り質問する。

「ま、いつものことだしね」

「そうね、放っておけばいいのよ、それに…」
ガン!!

ミラの頭に、酒瓶がぶつかり倒れた。

「ミ、ミラジエーンさあああああん!!!」

「それに楽しいでしょ?」

(怖いですうー)

頭から血を出しながら笑顔で言うが、ルーシィーにとっては恐怖でしかなかった。

「おらー!」

その時、ナツにぶつ飛ばされたグレイがルーシィの近くに倒れて来た。

「ぐっ！ あ、俺のパンツが!？」

「へっへっへー!」

いつの間にかパンツがなくなっていたのでナツを見ると、ナツがグレイのパンツを手で回していたところである。つまり、今のグレイは全裸、まごうことなき変態である。流石にやばいのでグレイはルーシイの方を向くと。

「お嬢さん、よければパンツを貸してくれないか？」

「貸すか!!」

セクハラ発言をかましたグレイにルーシイはグレイの顔面に思いつきり右ストレートをかました。

「はあ、ナツが帰って来た途端これだよ、ぶっ!!」

呆れたように言うリオであったが、途端に顔面に机がぶつかつた。

「おい……誰だ今机ぶん投げたやつ!ぶっ飛ばしてやる!!」

(リオまで!?)

ついにリオもケンカに参加し始めた。さすがに机をぶつけられたらそりや怒る。リオも参加したことで喧嘩はまだ終わらず、それどころか激化してゆく。

「あー、うるさい。落ち着いて酒も呑めやしないじゃないの。……あんたら、いい加減にしなさいよ?」

するとテーブルに座っていたカナが苛立った様子でカードを取り

出した。

「アツタマきた！」

グレイは左手の掌に右手の拳を乗せる。

「うおおおおお!!」

エルフマンは魔法で右腕を変化させる。

「全く……困った奴らだ」

ロキの指にはまっている指輪が強く光り出す。

「いい加減、頭冷やそつか？」

「かかってこい!!」

ナツとリオはそれぞれ両手に炎と水を宿す。

「あらあら、これは困ったわね」

「え、嘘!?!魔法でケンカ!?!」

「「あー!」」

ミラは少し焦りだし、ルーシイーはハッピーとルナを両手に持って前に出しながらも不安に襲われる。すると、

「やめんかああ!!バカたれ共おおお!!」

巨人が現れた。そうとしか言いようのない人物が一喝する。すると、先程の騒ぎが嘘のように皆動きを止めた。

「デカ——っ!!!」

「あ、じいちゃん」

「あら、居らしたんですかマスター」

「うん」

とミラがマスターを見上げながらそう言った。

「マスター!?!」

「ダアーツハツハハ、みんなしてビビりやがって!この勝負は俺の勝
びっ!?!」

静まり返る空気の中、空気の読めないナツ^{バカ}が高笑いをあげたが案の
定、マスターにあっさり踏み潰された。

「む!? 新入りかな!?!」

「は、はいいい……」

完全に怯えた様子で答えるルーシィ。

「ふんぬううう!!」

巨人は雄叫びをあげるとその身体がどんどん小さくなりー。

「よろしくネー!」

「ちっさー！」

子供くらいの大きさになってしまった。この男が妖精の尻尾のマスター、マカロフ・ドレアーである。

「とうっ！」

マカロフは2階に向かってジャンプし、空中でくるくる回転する。しかし――。

「みしよげっ!？」

体制を崩し、2階の手すりに頭をゴチン、とぶつけた。頭を抱えてうずくまるマカロフを見てキルド中が微妙な空気になる。リオを含めた数名は笑いを堪えている。

「まくたやってくれたの貴様等。見よ、この評議院から送られた文書の量を！全部苦情ばかりじゃ！」

気を取り直してマカロフは手に持っていた文書を読み上げる。

「まずは…グレイ！」

「あ?..」

「密輸組織を叩いたのはいいが…その後素っ裸で街を歩き、拳句の果てに干してある下着を盗み逃走」

「いや、だって裸で居るのはまずいだろ」

「じゃあまず脱ぐなよ」

グレイの返答に冷静にツッコむエルフマン。マカロフはため息をひとつ吐くと再び読み始めた。

「エルフマン、貴様は要人護衛の任務中、要人に暴行」

「だって『男は学歴よ』なんて言い出すから、つい…」

マカロフは頭に手を当て首を横に振る。だんだん読むごとにシワが増えてる気がする。

「カナ・アルベローナ。経費と偽り酒場で飲むこと樽15個。さらにその酒の請求先が評議院」

「バレたか…」

「ロキ。評議員レイジ老師の孫娘に手を出す。タレント事務所から損害賠償が来とる」

「はは…参ったなあ」

そしてとうとう次に読み上げる人物の内容にマカロフは俯きながら読み上げた。

「そしてナツ…デボン盗賊一家を壊滅するが民家7件も壊滅。チエーリ村の歴史ある時計台倒壊。フリージア教会全焼。ルピナス城一部損壊。ナズナ溪谷観測所崩壊により機能停止。ハルジオン港半壊…」

マカロフに言われてさすがのナツも他の人同様にバツが悪そうな顔をしている。

「後リオ…お主は特に問題を起こしておらん。せいぜいナツとの依頼の時の苦情しかない。むしろ感謝状が来とる」

「ははは…何か照れるね」

「お前さんが唯一の希望じゃ。これからも頼むぞい。ホントまじで」

マカロフの切実な願いにリオは顔を引きつらせていた。

（てか、雑誌に載ってたのってほとんどナツとリオだったのね…）

雑誌で見たフェアリーテイルが起こした問題、そのほとんどがナツの仕業だということが分かったルーシィーはナツに呆れていた。

「アルザック、レビィ、クロフ、リーダー、ウォーレン、ビスカ……etc……」

「貴様等あ、ワシは評議院に怒られてばかりじゃぞお」

マカロフが体を震わせて言うが

「だが、評議院などクソくらえじゃ」

マカロフは文書の束を魔法で燃やすと、ナツに向かって放り投げ、ナツは口でキャッチする。マカロフの突然の一言にルーシィーは啞然としていた。

「よいか、理を超える力はすべて理の中より生まれる。魔法は奇跡の力なんかではない。我々の内にある“気”の流れと自然界に流れる“気”の波長があわさりはじめて具現化されるのじゃ。それは精神力と集中力を使う。いや、己が魂すべてを注ぎ込む事が魔法なの

じゃ。上から覗いている目ン玉気にしてたら魔道は進めん。評議院のバカ共を怖れるな

自分の信じた道を進めェい!!! それが妖精の尻尾の魔導士じゃ!!!

マカロフが人差し指を上に向けて発した言葉にギルドの全員がマカロフと同じ様に指を立てて雄叫びを上げる。

さっきまでの空気とは裏腹に皆が笑顔で騒ぐその光景にルーシイは感動し、これからのことを思ってたか、期待でキラキラと輝いていた。

「はいーこれであなたもギルドの一員よ」

「わあ、やったー!」

ルーシイは右手の甲を差し出し、ミラにギルドの紋章を入れてもらい、嬉しそうにナツとリオに話しかける。

「ナツー、リオー、見てー!!フェアリーテイルのマーク入れてもらっちゃったー!」

「おー、似合ってるね」

「あっそう、よかったな、ルイージ」

「ルーシイよ!!」

「?ナツどこ行くの?」

「仕事、金ねえしな」

ナツの前にあるのはリクエストボード。ギルドに所属している魔導士たちはこのボードに貼られた依頼の中から自由に仕事を選んで仕事に行く。

「あつ、じゃあ俺も連れてってよ」

「おう！んで…どれにすつかな」

「報酬のいいやつがいいよね」

「ねえねえ、これなんてどう？」

「盗賊退治で20万J？結構美味しい仕事だね」

「よし、これにすつか！」

「ねえ、父ちゃんまだ帰ってこないの？」

ナツとリオは一緒に受けるクエストを決めて、ナツが依頼書を破いて取り出した時、一人の少年の声が聞こえてきた。

「くどいぞロメオ、貴様も魔導士の息子なら親父を信じて大人しく家で待っておれ」

「だって、3日で戻るって言ったのに、もう一週間も帰って来ないんだよ。探しに行ってくれよ!!心配なんだ!!」

「冗談じゃない!!貴様の親父は魔導士じゃろ!!自分のケツもふけねエ

魔導士なんぞこのギルドにはおらんのじゃあ!! 帰ってミルクでも飲んでおれい!!」

「バカ——!!!」

「おふっ!」

ロメオがマカロフの顔を殴り駆け出して出ていったところをナツとリオはじつと見つめ、ルーシイはミラに厳しいのねと呟いていた。

「マスターも本当は心配してるのよ」

ミラがそう言つて食器を片付けていると

ドゴオン!!

「お、おい、依頼板壊すなよ」

掲示板を壊したナツはその言葉を無視して、荷物を持ってギルドから出ていった。

「マスター。ナツの奴ちよつとやべえんじゃねえの?」

いつも「自分に合う仕事がない」などとほざいて仕事に行かないナブがマカロフに言った。

「アイツ、マカオを助けに行く気だぜ」

「これだからガキはよお」

「んなことしたつてマカオの自尊心が傷つくだけなのに」

それを皮切りに他の人も次々と喋り出す。これはマカオのことを思つての発言でもある。魔導士には魔導士なりのプライドが存在するためである。

だが、マカロフはそれらを切つて捨てた。

「進むべき道は誰が決めることでもねえ。放っておけ」

ちよつと腫れた頬をさすりながらマカロフは酒を飲み始める。

「……ルナ、俺たちも行くよ」

「はい」

リオとルナもまた掲示板から離れてナツたちの後を追つた。

「急にどうしちゃつたのナツ？　リオも追っかけて行っちゃうし」

「二人ともマカオを助ける気なんでしょうね。ナツとリオもロメオ君と同じだから。二人のお父さんも出ていったきり帰つてこないのよ。お父さんつて言つても育ての親なんだけどね。」

しかもドラゴン」

ガタン!!

ルーシイが驚いた拍子に椅子から落ちた。

「ドラゴン!? あのと二人つてドラゴンに育てられたの!? そんなの信じられるわけ……」

「ね」

「小さい時二人は同じ場所で2頭のドラゴンに拾われて、言葉や文化、魔法を教えてもらったんだって。でもある日、2人の前からそのドラゴン達が突然と姿を消した」

「そっか…それがイグニール…でもナツの親はイグニールって名前は聞いたけどリオの親もドラゴンだったんだ」

「ええ、ラギアノスって名前なんですって」

「じゃあ二人は兄弟ってこと？」

「いいえ、でも兄弟のように仲はいいわよ。2人ともいつかイグニールとラギアノスに会えるのを楽しみにしてるの、そーゆーところが可愛いよね」

「あはは」

嬉しそうにナツとリオのことを話すミラにルーシーは苦笑いで答えた。

「私たちは…フェアリーテイルの魔導士たちは…みんな何かを抱えてる、傷や 痛みや 苦しみを…私も」

「えっ？」

「ううん、なんでもない」

ミラがにっこりと笑って返した。

「・・・うつ、うつ」

外ではロメオが涙を流していた。父親が戻って来るか不安で仕方ないはずだ。ロメオはまだ10歳にもいっていないのだ、この年齢で父親が居なくなったらあまりにも酷だろう。

そのロメオの頭をナツがポン、と手を置いて励ました後そのまま去って行った。

リオもまたロメオの頭を撫でた後、ナツを追った。

「ナツ兄、リオ兄……」

2人はマカオを助けるために、マカオを心配して涙を流すロメオのためにハコベ山へと歩き進めた。

双竜と猿と牛

あの後ナツ達は馬車に乗ってハコベ山へ向っていた。

「それでさー、あたし今度ミラさんの家に遊びに行くことになったんだー!」

「下着とか盗んじゃ駄目だよ」

「盗むかつ!」

「じゃあ、盗むのは上着?」

「何も盗まないわよ!」

ハコベ山に向かう馬車の中でルーシイが猫2匹にツツコミまくっていた。ナツとリオはぐったりしている。

「う、うつぶ…」

「な、なんでルーシイが、う、居るの……?」

2人共激しい乗り物酔いに苦しめられていた。そんな2人を見てルーシイは話し出す。

「だってー、せっかくだから何か妖精フェアリーテイルの尻尾の役に立てないかなーって。それに仕事の話も流されちゃったし」

(株をあげたいんだ!絶対そうだ!)

ルーシイはギルドのためだと言っているがハッピーは株を上げるためだと推測した。

「ってというか！ナツはともかくリオも酔いやすい体質なの!？」

「その通り。だから今みたいにナツと2人で酔ってる時は大変なんだよ」

「た、対処法はあるんだけど、今回は、忘れちゃって……、うぷ……」

リオが口を抑えて言った。

「それはそうとしてマカオさんを探すの終わったら住む所探さないとな」

「オイラとナツの家に住んでもいいよ」

「本気で言ってるとしたらヒゲ抜くわよ猫ちゃん」

ハッピーはさりげなく誘ったがルーシイは目を据わらせて言った。

その時、ガタン、と音を立てて馬車が止まった。

「うおお、止まったー!」

「着いたー!」

馬車が止まったことにより一瞬で復活したナツとリオは喜んだ。

「すみません……此処から先は進めないです……」

申し訳なさそうに言う御者に礼を言うのアミク達は馬車から降りた。なんだか今日は遮られることが多いなーと思いつながらルーシイも降りた途端呆然となった。

「な、何これ!?!いくら山とはいえ今は夏季でしょ!こんな吹雪おかしいわ!」

ルーシイは開け放たれたドアから見たのは一面雪が積もった銀世界だった。

「さ、寒!!」

「そんな薄着してっからだろ」

「風邪引くよ?」

「あんた達もにたようなもんでしょ!?!」

「俺たちは寒さに耐性があるからね」

「その毛布貸して〜」

そう言つてルーシイはナツのリユックから毛布を引つ張り出すと腰に付いているホルダーから1本の銀色の鍵を取り出した。

「開け! 時計座の扉、ホロロギウム!」

ルーシイがそう唱えると時報のチャイムと一緒にリ才達の目の前に古時計のような星霊が出現した。

「おお時計だ!」

「へえ〜これが星霊魔法…」

「カツコイイ〜!!」

リ才達は目の前で起った星霊の召喚に少し感激していた。それよりルーシイが見当たらない。と、思ったら。

「……」

ホロロギウムの中に毛布に包まったルーシイがいた。

「え、と何してるのルーシイ?」

「ぱくぱくぱく」

ルーシイに聞くが何も聞こえない。口を動かしてはいるがどうやら声はこちらに届いていないようだ。

「何言ってるんだお前?」

「『あたし、ここにいる』と申しております」

突然ホロロギウムが喋った。どうやら中にいるルーシイの言葉を喋ってくれるようだ。

「何しに来たんだよ……」

さすがのナツも呆れたようだ。だが、ルーシイはそれを無視して話す。

「『マカオさんはこんな場所になんの仕事をしに来たのよ?』と申しております」

「知らないでついてきたの?」

「大丈夫か？本当に」

「？」

ルーシイはまだ理解していなかった。

「凶悪モンスターバルカンの討伐だよ」

「えっ」

『私帰りたい』と申ししております」

「はいどうぞと申ししております」「あい」

「吹雪もひどくなつたからしばらくは下山できないよ、とも申ししております」「その通り」

ルーシイは顔を青ざめながらホロログウムの中で帰りたいたいと言つたがリオ達はそれを無視して先へと進んだ。

「マカオー!!どこだー!!!」

「マカオー!!」

「いるなら返事してー!!!」

「してー!!」

しばらく歩いてもりオ達はマカオを見つげられていなかった。

すると、雪山の天辺から人影のようなものが飛び降り、ナツの頭上から殴り付けてきた。

「バルカんだ!!」

そこに現われたのは猿型のモンスターであるバルカンだった。ハッピーはとっさに叫ぶもバルカンはそれを無視してある方向へと走っていった。その方向にはホロロギウムに入っているルーシイがいた。

「人間の女だ」

ルーシイは突然目の前に現われたバルカンに驚いた様子だったがバルカンはホロロギウムごとルーシイを連れてその場を去って行った。

「ウホホ——!!!」

「しゃべれんのか」

「色々突っ込むところあったけど一番はそこ!？」

「『つてか助けなさいよお——!!』と申しております」

「『あっ』」

連れていかれたルーシイ（ホロロギウム）の叫びもむなしく吹雪の中に消えてしまった。

ハコベ山、バルカンの住処である洞窟の真ん中でバルカンがホロロギウムの周りで踊っている。

『『なんでこんな事になってるわけ!? てか、この猿テンション高いし!』』と申されましても……!』」

ルーシイはホロロギウムの中に入りながらその周りをぐるぐるとまわっているバルカンに怯えていた

「ごこつてあの猿の住家かしら、てかナツとりオはどうしちやったのよお」

「女」

「ひいー!」

バルカンがルーシイを見つめていると、突然ホロロギウムがポンツと消えた。

「ちよつとー!ホロロギウム!消えないでよ!!」

「時間です、ごきげんよう」

「延長よ!延長!!ねえ!!」

ルーシイは叫ぶがホロロギウムは出てこなかった。

「くうう。こうなったら…やるしかない!」

ルーシイは腹をくくつてホルダーの中から金色の鍵を取り出した。

「開け! 金牛宮の扉、タウロス!」

そう唱えた直後。

「MO——!!!」

雄叫びと共に現れたのは背中に斧を背負った大きな牛だった。

「牛？」

「タウロスは私が契約している星霊の中でも一番のパワーの持ち主よ!!」

ルーシイはタウロスに目の前のエロザルを倒すように指示しようとした時、

「MO！ ルーシイさん、今日もナイスバディですなあ」

「しまった、こいつもエロかったんだ…」

タウロスの性格を忘れていたことにルーシイは頭を抱えた。

「俺の女、奪うな！」

「俺の女？ それは聞き捨てなりませんな！」

「そうよタウロス！あいつをやっちゃって!!」

「俺の女ではなく俺の乳と言ってもらいたい」

「もらいたくないわよ!!」

バルカンが言ったことに異議申し立てをしたタウロスだったが言い返した発言があまりにヒドかったためルーシイはツッコんだ。

二匹のにらみ合いが続き、闘いが始まろうとしたその時

「うおおおおお!!火竜の鉄拳!!」

ナツが拳に炎を纏わせながら迫る!そして思いっきりぶっ飛ばした!——タウロスを。

「MO——!!?」

「そっち!」

タウロスは吹っ飛び、ルーシイが悲鳴をあげた。

「怪物が増えてない?」

「それ、味方!あたしの星霊!」

ルナとハッピーも飛びながらやってきた。

「ナツ、あの牛ルーシイの星霊だつて」

「ん?そうだったのか。わりいなルーシイ」

「もう!折角私がやろうとしてたのにー!!」

リオがナツが倒したのはルーシイの星霊だということを説明するとナツはルーシイにわびを入れたがルーシイは怒っていた。

「ごめんね。代わりに俺たちがやるからさ」

リオはそう言うのとバルカンに対峙するとナツもその隣に立つ。

「よしっ、やるかりオ！」

「うん。帰還直後の相手としては申し分ないね」

まるで何年も連れ添った相棒のようにやりとりする2人を見て違和感を覚える。ルーシイがその違和感の正体にたどり着けないままいると、バルカンはさすがに2対1だと分が悪いと思っただのか指を氷の中に突っ込んで大きな氷の塊を取り出した。

「ナツ、よろしく」

「おう！」

「うほおおおおおおおおお!!」

バルカンはリオ達に氷の塊を投げつけた。

「いくぞお…火竜の咆哮!!!」

しかしナツはそれをブレスで防ぎ、氷は瞬く間に溶けて水になっていった。

「よし」

そしてリオはナツのブレスにより溶けた氷の水を

大きく吸い込んだ。

「えっ!？」

すると、空中に散っていた水は全てリオの口へと吸い込まれていく。ルーシイはその光景に見覚えがあった。ついこの前、ハルジオンでナツがボラの放った炎を喰べていた時と一緒に――。

「もしかしてリオも!？」

ルーシイはやつと悟る。そもそも伏線は多くあったのだ。ナツとハッピーのように一緒にいるリオとルナ。酔いやすい体質。そしてドラゴンに育てられたという過去、これ程までにナツとの共通点があつて気付かなかつたとは。

「ふう――。ご馳走様でした」

リオはそう言うど手に水を纏い始めた。

「リオ。あなたつてもしかして――」

「その通りだよルーシイサラマンダー。火竜と一緒にいる『双竜』の片割れの海竜リウアイアスがリオなんだ〜!」

ルナに説明を受けいるルーシイは未だに驚きが隠せなかった。

フェアリーテイル
妖精の尻尾の『双竜』。

それはファイオーレ王国中でも話題となつている互いに火と水を操る魔導士のことである。火を操る火竜サラマンダーだというのはナツだと分かっていたが、片割れの海竜リウアイアスがまさかリオのことだつたなんて。

「それじゃあ、今度はこつちから行こうか?」

リオはそう言うのとバルカンの方へと向っていった。バルカンは咄嗟に殴ろうとするがリオはそれをあっさりと躲した。

そして腕を振りかぶって――

「海竜の鉄拳!!」

思いっきりバルカンを殴った。バルカンはそのまま吹っ飛び、壁へと突っ込んでいった。その勢いのまま、壁を突き破って外へと行ってしまった。

「よし!」

「ナイスだリオ!」

「凄い……っていうかあの猿にマカオさんの居場所聞かなくて良かったの!?!」

「あ!!そうじゃねえか!!」

ルーシイはリオの魔法に言葉を失っていたが正気に戻ってマカオのことについて聞いたがナツもナツですっかり忘れていたようだ。

「ルナ、ハッピー。お願い」

「は〜い」「アイサ――!」

リオはルナとハッピーにバルカンを運ぶように頼み、2匹はそのまま外へ出て行った。

外まで飛ばしてしまつたバルカンを連れて来て、というリオの願いにより気絶してるバルカンを苦勞して運んで来たハッピーとルナ。

「さてと、マカオの居場所を教えてもらわないとね」

「そーだな」

ナツとリオが話していると、突如、バルカンが光に包まれた。

「な、何い!?!」

「眩しいい!」

「これは!?!」

それぞれそう口にする、現れたのは傷だらけの中年の男性だった。

「マカオ!」

「え、この人がマカオさん!? さっきまでエロザルでしたけど!?!」

「バルカンに接テイクオーバー 収テイクオーバーされたんだ!」

「接テイクオーバー 収テイクオーバー?」

ハッピーが言う聞きなれない魔法にルーシイは首を傾げる。

「身体を乗っ取る魔法だよ。バルカンはそうやって生き繋ぐモンスターだったんだ!」

とりあえずマカオを持って来た毛布の上に寝かせた。

「長い間、バルカンと戦っていたんだね……」

「おい、マカオ！ 死ぬんじゃないぞ！ ロメオだって待ってんだ！」

「ナツ、ここは俺が」

リオはそう言うとマカオに両手を添えた。

「え……？ 一体何を……？」

「まあ、見てろ」

突然のリオの行動にルーシイが戸惑うも、ナツが短く言う。マカオを見ると――。

「えっ!? 傷が塞がっていく!?!」

マカオの全身が光に包まれていて見る見るうちに傷が治っていくのだ

「クーラ」

リオがそう言った直後、マカオの傷が全部癒された。

「凄い！ リオは治癒魔法まで使えるの!?!」

「まあね。ラギアノスが教えてくれたんだ」

リオはルーシイにそう説明していると気絶していたマカオがうめ

き声を上げながら目を覚ました。

「マカオ！」

「気がついたか！」

「ようナツ、リオ…。クソ、情けねえ…19匹は倒したんだ…」

「え!？」

「20匹目の変異種で勝てなくて接テイクオーバー 収されちまった…：…情けねえ。これじゃロメオに合わせる顔がねえ…：…」

「んなことあねえよ。そんだけ倒しや上等だ」

「そうだよ。それよりも早く帰って心配してるロメオに無事な顔を見せに行くよ」

「へっ…おう」

マカオはリオの手を掴んで起き上がった。リオが癒したお陰か動ける程度には回復したようだ。

(あの猿、1匹だけじゃなかったの…：…？ あの猿よりは弱いだろうけど、それを19匹も倒すなんて…)

改めて自分の所属しているギルドの強さを実感するルーシィ。

(凄いなあ…敵わないや)

「ルーシィ、にやついてどうしたの？ 怖いよ?。」

「いやらしい」

「ヒゲ抜くわよ、猫ちゃん達!」

夕日が沈みかける、オレンジ色のマグノリア。そこに、ロメオが1人で立っていた。此処からずっと動いていない。ロメオは自分の父を連れて帰ると言ったナツ達を信じて待っていた。そしてその想いは、今報われた。

「ロメオー!」

自分と呼ぶナツの声。見るとそこにはリオの隣で、ナツに肩を借りながらもしっかりと自分の足で歩いている、申し訳なさそうな顔のマカオが居た。

「父ちゃ——ん!!!」

「おおっ!!」

ロメオがマカオに抱きつき、マカオは後ろに倒れた。

「父ちゃんごめんっ!...俺...」

「心配かけてすまなかつたな。ロメオ」

「いいんだ。俺は魔導士の息子なんだから。それに待つなんて当たり前だろ?俺は父ちゃんの息子なんだから」

マカオは泣いているロメオに心配掛けたことを謝りながら強く抱きしめた。

「そうか。今度クソガキ達にからまれたらこう言ってやれ。てめえの親父は化け物19匹倒せるのかってよ」

「うん…うん！」

マカオが不敵な笑みを浮かべながら言ったその一言にロメオは嬉し涙をこぼす。

そして、ロメオはギルドに向うナツ達の背に向けて声をあげる。

「ナツ兄…！リオ兄…！ハッピー…！ルナー…！それにルーシイ姉も…！本当にありがとう！！」

ルーシイはロメオの言葉に小さく手を振り返した。ナツもリオもハッピーもルナーも互いに顔を見合わせて心地良さげに笑うのだった。

チーム結成！初めての依頼

ある朝、マグノリアのとある家

「いい所見つかったなあ」

金髪の少女ルーシイは風呂に入っていた。

マカオを助け出した後、ルーシイはマグノリアの街で住むことになる家を見つけることが出来た。家賃は高めだけど商店街が近いめかなり便利なのだ。

「7万^{ジュエル}Jの家賃にしては間取りもいいし収納スペースも多いし、真っ白な壁。ちよつとレトロな暖炉に、竈までついている！そして何より一番ステキなのは……」

ルーシイがお風呂からあがりバスタオル姿で部屋の扉を開けると、

「よおー！」

「あたしの部屋ー!!？」

ナツとハッピーが部屋を散らかしていた

「何であんた達がいるのよー!!!」

ゴシヤツ！

「まわっ!？」

回し蹴りを、ナツとハッピーに全力でかますルーシイ

「だってミラから家決まったって聞いたから……」

「聞いたら何!!?勝手に入ってきていいわけ!!?」

荒れているルーシイを横目に、ナツとハッピーは自由に部屋を見てまわっていたそこに

ピンポーン!

「ん?はーい」

インターホンの音が聞こえルーシイが出ると

「おはようルーシイ」

「おはよー」

そこにはリオとルナがいた。

「2人ともどうしたの?」

「ミラから聞いたんだ。家が決まったって。これ差し入れ」

「私の好きなチーズケーキ」

「ありがとう2人とも!上がって上がって」

そう言っつてルーシイは2人を家に上がらせた。

「おっ!?!リオ!ルナ!」

「ルナくおはようく」

「なんだ、ナツとハッピーも来てたの?」

「ナツ、ハッピー、おはよー」

「まったく、リオとルナはともかくあんた達は親しき仲にも礼儀ありって言葉知ってる？女の人の部屋には勝手に入らないものなのよ。モラルの欠如もほんといいところだわ」

「オイ、そりやあ傷つくぞ…」

「自業自得だよ…」

「いい部屋だねー」

「爪を磨ぐな！猫科動物！」

ハッピーが部屋の壁でガリガリと爪を磨いでいると

「ん？　なんだこれ？」

ナツはルーシイの机の上にあった大量の紙の束を拾い上げる。それに気づいたルーシイはすぐさまナツに近づく。

「ダメー!!」

「のわっ!？」

ナツを突き飛ばし、紙の束を奪う。

「気になるな、んだよそれ？」

「俺も気になる」

リオが興味深々に見て、たんこぶができたナツが聞くも、ルーシイ

は紙の束を抱きしめて離さない。

「なんでもいいでしょ！というか帰ってー!!」

「せっかく遊びに来たんだから帰るのやだ！」

「超勝手!!」

ナツのマイペースさに早くも苦勞していそうなルーシイをリオは苦笑いしながら見ていた。

その後、落ち着きを取り戻し、私服に着替えたルーシイはナツ達に紅茶を出し、テーブルの椅子に腰掛ける。(ちなみにこの紅茶はルーシイが持ってきたやつである)

「まだ、引越したばかりで家具も揃ってないのよ遊ぶものなんか何もないんだから紅茶飲んだら帰ってよね」

ルーシイはふてくされたようにチーズケーキを食べながらそう言う

「残忍なやつだな」

「あい」

「紅茶貰っておいて残忍って…」

ナツ達はまだ居座る気でした

「あ、そうだ！ルーシイの持ってる鍵の奴等を全部見せてくれよ」

「あつ、ソレは俺もちよつと見てみたい」

「嫌よ、すごく魔力を消耗するじゃない、ソレに鍵の奴らじゃなくて星
霊よ!」

「ルーシイは何人の星霊と契約してるの?」

「6体、星霊は1体2体って数えるのよ。こっちの銀色の鍵がお店で
売ってるやつ。時計座のホロロギウム、南十字座のクルックス、琴座
のリラ。そしてこっちの金色の鍵が、『王道十二門』っていう門を開け
る超レアな鍵。金牛宮のタウロス、宝瓶宮のアクエリアス、巨蟹宮の
キャンサー」

「巨蟹宮?! 蟹か!」「カニー!」

カニと聞いてナツとハッピーのテンションは上がる

「どこに食いついてんのナツ達は」

そのときルーシイは何か思い出したようにぽんつと手を叩く。

「そういえばまだハルジオンで買った鍵の契約をしてなかったわ。特
別に星霊魔導士と星霊との契約の流れを見せてあげる!」

「おおー!」

「本当?」

「楽しみ〜!」

リオ達は星霊魔導士の契約を見れると聞いて興奮していた。

「血判とか押すのかな?」

「痛そうだなケツ」

「ナツ、お尻じゃないから」

リオ達の会話を聞き流しながらルーシイは鍵を取り出した。

「血判とかはいらないのよ見てて」

我、星霊界との道を繋ぐ者！ 汝、その呼びかけに応え、門ゲートをくぐれ！ 開け、仔犬座の扉…ニコラ!!!」

詠唱した途端、魔方陣と光が漏れた。

「「おおー………」」

「綺麗〜」

全員その幻想的な雰囲気雰囲気に声を失う。

そして、光はだんだん形をとっていき、現れたのは――

真っ白な小さな体に、角のような鼻、二足歩行でプルプル震える生物。

「プーン!!」

「「ど…どんまい」」

「ルーシイ、えつと…失敗は誰にでもあるからさ」

「気にしないでルーシィ〜」

「失敗じゃないわよ!!まったくもう。ああんかわい〜♡」

4人に励まされたルーシィは失敗じゃないと突っ込んだが、ニコラを抱き上げて頬ずりしていた。

「そ…そうなのかりオ?」

「いや、俺にはよく分からないけど」

「じゃ、契約に移るわよ」

「ププーン」

リオとナツはニコラが可愛いのか話しているのを尻目にルーシィはメモ帳を取り出してニコラとの契約に移ろうとしていた。

「月曜は?」

「プウーウン」

ニコラは首を横にふる

「火曜」

「プン」

ニコラは首を縦にふる。そこから水曜、木曜、と同じ事を繰り返して聞いていく

「地味だな」

「あい」

「確かに、思ってたのとは違うね」

「意外だね」

4人はただただソレを見ているしかなかった。
しばらくしてやっと契約が終了したらしい

「はい！契約完了！」

「ずいぶん簡単なんだね」

「確かに見た目はそうだけど大切なことなのよ。星霊魔導士は契約、即ち約束ごとを重要視するの。だから私は絶対約束だけは破らな
いってね」

「へえー」

「そうだ！名前決めてあげないと」

「ニコラじゃないの〜？」

「それは総称よ」

「！おいで、プルー！」

「[[[[プルー？]]]]」

「なんか語感がかわいいでしょ♪ねっプルー」

「プーン」

ハッピーはプルーを見ながら

「プルーは子犬座なのにワンワン鳴かないんだね変なのー」と言う

「あんだだつてニャーニャー鳴かないじゃない」

ルーシイがそう言うとプルーがルーシイの腕から抜け出しナツ達の前で踊り始めた。

「なにかしら?」

ルーシイが疑問に思っていると急にナツの顔が輝き出した。

「プルー! お前いいこと言うな!」

「プーン!」

そして互いにグッドサインを出す。

「何か伝わってるし!!」

「そーいや雪山でも色んな星霊だしてたな。お前、変な奴だけど頼れるしい奴だ。そうだな…」

ナツは何か考え事をして

「よし決めた! ここにいるオレたちでチームを組もう!!」

「へえー珍しくいい案出すじゃん」

「チーム？」

「あい！ギルドメンバーはみんな仲間だけど特に仲のいい人同士が集まってチームを結成するんだよ！一人じゃ難しい依頼もチームであれば楽になれるしね！」

「つまり一番頼れる人達で組む、助け合いの関係ってことだよ」

「良いわねそれ！面白そう!!」

ルーシイもそれなりにノリ気のようにだ

「まあ、俺も異論はないし賛成」

「おおおし！決定だー！」

「契約成立ね！」

「よろしく〜」

チームが結成し、ナツは早速リオも誘う予定だった依頼を持ってきたと依頼書を机に置いた

「さっそく行こうぜ！ほら！依頼はもう決めてあんだ!!」

「もうせつかちなんだから〜。シロツメの町かあ。聞いたことあるよ
うないような」

「うそっ!?!エバルー公爵って人の屋敷から本をとってくるだけで20
万ジュエルJ!!!」

「なっ？オイシー仕事だろ？」

その依頼を聞いてリオが反応する

「あれ？ナツ、その依頼ってたしか。」

ルーシイは報酬の他に依頼書の注意事項に書かれているところに目を向けて固まった。

*注意

とにかく女好きでスケベで変態！

ただいま金髪のメイドさん大募集!!

恐る恐るナツ達を見ると凄爽やかな笑顔で話していた。

「ルーシイって金髪だもんな」

「メイドの格好で忍びこんでもらおうよ」

「あ、あんた達最初から……は、はめられたあ!!」

ルーシイはプルプルと震えると頭を抱えて大声で叫んだ。

「星霊魔導士は契約を大切にするのかあ。偉いなあ」

「騙したなあー!!」

「それが狙いだっただか……」

「褒められた誘い方じゃないよね」

ナツとハッピーは嬉しそうに話しリオは頭を抱え、ルナでさえナツとハッピーに引いていた。

「騙すなんてサイテー!!メイドなんていやよー!」

「少しは練習しとけよ、ホレ。ハッピーとルナにご主人様とお嬢様つて言ってみろ」

「ネコにはいやああ!!リオ!助けてえ!!」

「ごめん、俺にはどうにもできない」

ルーシイはリオに助けを求めたがすでに依頼を受けているためりオはどうにも出来なかった。

一方その頃、魔導士ギルド『妖精の尻尾』フェアリーテイルでは――。

「あれ?エバル―屋敷の一冊20万シユエルJの仕事……誰かにとられちゃった?」

「ええ……ナツがルーシイとリオ達を誘って行っちゃったわ」

ミラは少しだけ残念そうに言う

「あくあ……迷ってたのになあ……」

レビイはがっかりしながらギルドボードを見る。ミラは食器を片

付けながらレビイと話す

「レビイ……行かなくてよかったかもしれんぞい」

「あ！マスター」

「その仕事……ちとめんどうな事になってきた……たった今依頼主から連絡があつてのう」

「キャンセルですか？」

ミラはマカロフに聞くがマカロフは首を横に振る。

「いや……報酬を200万ジュエルJにつり上げる……だそうじゃ」

「10倍!？」

「本一冊で200万だと!？」

報酬の金額が10倍につり上がったことに、ギルドの全員は驚きを隠せないでいた。

「な、なぜ急にそんな……」

ギルドで騒いでいる中、グレイだけはニヤリと笑っていた

「面白そうな事に……なってきたな」

潜入！エバルー屋敷！

ギルドが急な報酬の変更に戸惑い、騒いでいる中……

「ダーリア」

リオは馬車に乗る前に自分とナツに酔い止めの魔法をかけていた。

「いや〜やっぱこの魔法はいいなく。リオがいると本当助かる」

「へー、便利なもんね。酔い止めの魔法もあるなんて」

「毎回使えるわけじゃないんだけどね」

「何で？」

「この魔法って何回も使うと効き目がなくなっていくんだ。だから3回馬車に乗るのに1回の頻度でやってる」

「へー」

ナツは酔い止めの魔法のおかげで馬車の中なのにケロツとしており、リオはルーシーに自分の魔法のデメリットを教えていた。

「言ってみれば随分と簡単な仕事よねー」

「あれ？ 最初は嫌がってたのに元気だね」

「なんてったって私の最初の仕事だからしっかり行くわよ！」

「相手はスケベ親父。私、こう見えても結構色気には自信があるのよ？」

「ネコにはちよつと判断できないです」

「ハッピー、こういうときは嘘でもステキですぐらい言わないと」

（なんかすぐく馬鹿にされてる気がする）

「いっとくけどこの仕事、あんた等やる事ないんだから報酬の取り分は6・1・1・1・1・1だからね」

「ルーシイ1でいいの？」

「謙虚だね〜」

「あたしが6よ!!」

ハッピーとルナは、ルーシイの取り分を1だと決めつけて会話を進めようとするがルーシイがそれに突っ込む。

「ちよつと待て。俺たちもやることがある」

「おそろくけどね」

「何よ?」

「捕まったら助けてやる」

「そんなミスしません」

「魚釣りでも餌は無駄になることが多いんだよ」

「撒き餌とかね〜」

「あたしはエサかいっ!!」

ハッピーの失礼な一言にルーシイは憤慨した。

「うぷ……」

「うう……」

結局着く前にダーリアの効果切れ、ナツとリオがダウン。

「ご機嫌はいかがですか? ご主人様方々?」

「二め、冥土が見える……」

家での意趣返しなのか嫌みたらしく言うルーシイ。ナツとリオはもうボロボロだった。

「ご主人様はオイラだよー!」

「私にもお嬢様って言って〜」
「うっさいネコども!」

『シロツメの街』

「着いた!!」

「馬車には二度と乗らん」

「ナツ、それは無理」

「いつも言ってるよね」

ナツ達は街を歩いていた

「とりあえずハラ減ったな、メシにしよメシ」

「その前に、ホテルかどつかで荷物置かないと。それから飯にしよ」

「あたしお腹空いてないんだけど、あんた達は自分の火と水食べれば
?」

「とんでもねえこと言うなルーシイは」

「全くだよ」

「え?」

ナツとリオの一言にルーシイは首を傾げた。

「お前は自分のプルーや牛食うのか?」

「食べないわよ!」

「それと同じ。俺やナツは自分で作った魔法は食べられないんだ」

リオはルーシイに説明する

「そ、そうなの?自分の作り出したのは食べれないって結構不便ねー」

ルーシイは滅竜魔導士の欠点を聞いて意外と不便なところもあるんだと思った。

「そうだ！あたしちよつとこの街見てくる、食事は4人でどーぞ」

そう言うのと、ルーシイは街へと消えていく

「なんだよ、みんなで食ったほうが楽しいのに」

「まあいいよ、ルーシイにも色々あるんじゃない？とりあえずどこか探そう」

とにかく、腹ごしらえのためにレストランに入るナツ達。ナツ達は一足先に美味しそうな肉にかぶりつく。

「脂っこいのはルーシイに残しとくか」

「ルーシイ、脂っこいの好きそうだもんね」

「女性は脂っこいのは好きじゃないと思うけどね」

「そーだよ。ケーキだけ残しておこうよ」

「そうよ、あたしがいつ脂っこいの好きになったのよ？後、残すなら他のも残してよ」

「おう！ルー……シイ？」

「遅かった……ね？」

背後から声がしてナツとリオが振り返ると、メイド姿のルーシイが立っていた

「結局あたしってなに着ても似合っちゃうのよね、お食事はおすみですか？御主人様方、まだでしたらゆっくり召し上がって下さいね♪うふっ」

「どーしよお〜！冗談で言ったのに本気にしてるよ〜！！メイド作戦……！！」

「今さら冗談とは言えねえしな……こ、これでいくか」

「そんなことだろうと思っただよ全く……」

「それにのせられるルーシイもなかなかだね〜」

「聞こえてますが!!」

ナツとハッピーは冗談で言ったことなのに意外とノリ気なルーシイに戸惑ったがこのままいこうとコソコソ話しているのにリオは呆れ、ルナはルーシイがノリやすいことに逆に感心していた。

ルーシイはその会話の内容にツツコンでいた。

食事を終えた一同は依頼主の館に来て、依頼主と会っていた。パツと見た感じ苦労が多そうな老人だった。

「ようこそ、よくお越し下さいました。私が依頼主のカービー・メロンです」

（メロン？この街もそうだけど…どこかで聞いたことがあるのよね…）

（メロン）

「メロン！美味そうな名前だな！」

「あい！」

「ちよつと！失礼よ！」

大体皆同じことを考えていたと思う。

「あはは、よく言われるんですよ。それにしてもまさかあの有名な

フェアリーテイル
妖精の尻尾の魔導士さんに受けてもらえるとは……」

「そうか？こんなうめえ仕事がよく残ってたと思うけどな」

「きつと内容と報酬が釣り合っていないから、他の人達は警戒したんじゃない？」

そこで、カービィがナツとリオに気付く。

「もしや、あなた方はあのフェアリーテイルの双竜ですかな？」

「お、何だ、俺達のこと知ってんのか？」

「ええ！そりやあもう有名ですもの！行く先々で聞きますよ、その名は」

「なんか照れるね」「だな」

リオは照れくさそうに頬を掻きナツはカカカと笑った。

「ええつとそちらの方は？」

「あたしもフェアリーテイルの魔導士です!!」

ジーツとカービィはルーシィを見ると

「その服装は趣味か何かで？」

「あたし、帰りたくなってきた」

涙を流しながら言うルーシィにナツは爆笑し、ハッピーとルナは笑いを堪え、リオは苦笑いしていた。

「ま、まあ、では仕事の話に移りましょう」

「おう！」

仕事の話をししましょう、と言い出すカービィにナツが元気良く答えた。

「私の依頼したいことはただ1つ。エバルー公爵の持つ本、『DAY BREAK』の破棄または焼失です」

「焼失？だったら家ごと燃やせばすぐ片付くな」
「あい」

ナツは手に炎を宿しながら言い、ハッピーもそれに便乗する。

「そんな事したらダメでしょ！すぐ牢獄行きよ！」

「……本を破棄する理由が気になるね」
「うん」

「んな事どうでもいいーじゃねえか、20万だぞ、20万」
「いえ……200万Jお払います。報酬は200万Jです」

それを聞いた瞬間、皆驚愕した。

「に!？」

「ひゃ!？」

「く!？」

「まん!？」

「な、なんじゃそりゃあああつ!!!」

「おや？ 値上がったのを知らずにおいででしたか」

「いや、そんなの聞いてないですよ！」
「200万を5等分すると、うおおおっ！計算できん！」

「簡単です！オイラが50万！ナツが50万！リオが50万！ルナが50万！残りはルーシィです！」

「頭いいな！ハッピー！」

「残ら(ない)(ないわ)よ!?!」

「馬鹿なのあなたたち! 私とリオで200万に決まっているでしょう!」

「二俺(オイラ)(あたし)の分は!?!」

ナツ達がギャーギャー騒ぎ立てる。ルナものんびりとした口調がなくなりお金を自分とリオで独占しようとしており、ナツ達にツッコまれていた。

「まあまあ、皆さん落ち着いて」

「でも、なんで急にそんな200万に」

「それだけ、どうしても、あの本を破棄したいのです。私は、あの本の存在が許せない」

カービイはどこか悔いるように吐き捨てる。そして、ナツの頭が燃えて立ち上がり

「燃えてきたあああ!」

とリオとルーシイを引っ張って出ていきハッピーとルナも追いかけていった。

そうしてリオ達を見送るカービイの目は険しいものだった。

『エバル―屋敷』

「失礼しまーす! 金髪のメイドさん募集を見て来た者ですが誰か居ませんかー!!」

ルーシイを一人門の前に立たせると、残り全員は近くの木に隠れて

見張っていた

「ルーシィー頑張れよー」

「気をつけてねー」

「フアイト〜」

「頑張れ〜」

ルーシィは自分の容姿に自信があつたので採用されるだろうと考えていた。そして内心「ちよろいわ……」と思い、あくどい顔を浮かべていた。

「……ん？何か聞こえない？」

「「えっ？」」

リオが何か聞こえると言ったが3人は聞こえないのか首を傾げていた。

するとルーシィの足下付近の地面がボコツと浮かんだ直後、1人のゴリラのようなメイドが飛び出した。

「あなた、メイド募集の広告を読んで来たの？」

「は、はい！」

ルーシィが震えながら言うと、

「ご主人様！募集広告を見て来たそうですが!？」

(穴!!?)

メイドが大きな声で穴に向かってそう叫んだのにルーシィは戸惑った。

すると今度は、地面から変な髭の男エバルー公爵が飛び出してきた。

「ボヨヨン！我輩を呼んだかね？」

（き、来たー！）

「ふむ、どれどれ」

「よろしくお願いしま〜す」

エバルーはルーシイを観察するように見る

（と、鳥肌が……！頑張れ、私！）

ルーシイが我慢していると、突然エバルーが後ろを向き、ため息をつく

「いらん、帰れブス」

「ブ…!？」

突然の罵倒にルーシイは困惑した。

「そういうことよ。帰んなさい、ブス」

ゴリラメイドにも言われさらに傷つくルーシイ。

「いいかね？我輩の様な偉〜〜〜〜い男には……」

その言葉を合図に、また地面から穴を作り人が出てきた。

「彼女たちの様な美しい娘しか似合わないのだよ」

現れた女性は、お世辞にも美しいとは言えないモンスター級のブサ

イクが勢揃い

((((え————!?!))))

「もうご主人様つたら〜」

「お上手なんだから〜」

「ご主人様超クール」

「ブスはお帰りくださいな」

新たに出てきた女性にもブスと言われたことでルーシイはさらに傷つき、そこから立ち去った。

そして彼女は泣きながら木の陰で体育座りをしていた。

「しくしく」

「使えねえなあ」

「違うのよ!!あのエバルーってやつ的美的感覚がおかしかったのよ!!」

「言い訳だ」

「キィ————!!悔し————!!」

「どうする?ルーシイのメイドでの潜入が出来ないとなると中に入るのは厳しいよ」

「こうなったからには作戦Tに変更だ!」

「作戦T?」

「内容は〜?」

「突撃のT」

「それは作戦とは言わない」

「あの親父絶対許さん!」

ルーシイは先程の事もあり怒り浸透中だった。

一同は屋上から侵入することにした。ルーシイはさつきと私服に着替え、ハッピーとルナで頑張つて3人を運び、屋上に降りる。

「よし、誰も居ない。ナツお願い」

「任せろ！」

リオは周囲に誰もいないことを核にしてから指示を出し、ナツは窓ガラスに手を置いた。そして火の熱を使い窓ガラスを溶かして行く。

「なんでこんなコソコソとしなきゃいけないんだよ、正面突破でぶっ飛ばせばいいのによー」

「当たり前でしょ！あたし達が今やってるのは泥棒と変わらないんだから。下手な事したら軍が動くわ」

「それにナツ、ハルジオンでのこともあるしこれ以上やらかしたらあの人が怒るよ？そりゃもの凄い気迫で」

「……よーし！こっそり潜入するぞー!!」

リオがそう言うとナツは顔を真っ青にした後、冷や汗をかきながらこっそり潜入することに賛成した。

「きゅ、急にどうしたのナツ。あの人がって？」

「ああ、いずれ紹介するから今は依頼に集中しよ」

リオの一言にルーシイは頷いて、一同は窓を開けて中に入った。

「ここは…物置かしら？」

「みたいだね」

「ナツー、リオー、見てみてー」

「おっ、似合ってるぞハッピー」

「似合ってるけど早く探すよ。見つかるかもしれないし」

ハッピーが、ドクロの仮面を被って楽しんでいる。

ルーシイとリオ、ルナは一つずつ部屋の扉を開け、中を確認していく。

「つーかよお、全部の部屋の中探すのか？」

「当然！」

「それだと骨が折れるけどね」

「誰か取っ捕まえて本の場合聞いた方が早くね？」

「見つからないように任務を遂行するのよ。忍者みたいでかつこいでしょ？」

「に、忍者かあ」

「変なところに食いついたね」

「… あっ侵入バレた」

「えっ？」

リオがそう言うと、地面が盛上がり、メイド軍団が飛び出してきた。

「メイド!? つかリオ何でわかったの!？」

「音」

「リオは耳がいいんだよ」

「ハイジヨ シマス」

「ウワ——!!」

「怖いー!」

「おばけー!」

「いやーん!」

ハッピーがまだ被っていたガイコツでメイド達を脅かす。

「やかましいッ!!」

『きゃああああ!!』

ナツが炎のパンチでブサイクメイド達をぶつとばした。

「フライングバルゴアタック!」

今度はゴリラメイドがボディプレスをして来てナツを下敷きにしようとした。

「ふっ!!」

しかし、リオが防ぎ、服を掴んで上に投げた。

「せああ!!」

水を足に纏わせてゴリラメイドを蹴り飛ばす。

「まだ見つかるわけにはいかんで御座るよ、ニンニン」

「ニンニン」

「いや、もう見つかってるから」

「ってか普通に騒がしいわよあんた達」

「とにかくここにいるとまた誰か来るから適当な部屋にでも隠れないと」

「そうだね〜」

「来るなら来いでござる」

「いいから隠れるの!!」

バタン!

「ふう危なかったあ」

ナツ達が入った場所には、本がたくさん置いてあった。

「うおっ！なんだココ！本ばつかでござる！」

「あいっ！でござる」

「ここなら『DAY BREAK』もありそうだね」

「よし探すぞー！」

「あいさー！」

「私達は高い所探すよー」

「辺りの警戒は任せて！」

それぞれ、素早く自分のやるべきことを分担し、実行に移す一同。

「エバルー公爵って頭悪そうな顔してるわりには蔵書家なのね」

「人は見かけによらないもんだね」

「うほっ！エロいの見つけ！」

「魚図鑑だー！」

「ケーキの本〜！」

「なんだこれ？字ばつかだな」

「ナツウ普通はそうだよ」

「あんたら真面目に探しなさいよ!!!」

リオとルーシイは協力して本を探すが、向こうの本棚ではナツ達が騒いでおり全然関係ないやつで盛り上がっていた。

「リオ〜何か金色のカバーの本があった〜」

「ふ〜ん……『DAY BREAK』か…え？」

「はや——！つてかこんな簡単に見つかっていいの？」
「よーし！じゃあ燃やすか！」

『DAY BREAK』はあっさりが見つかり、ナツは本を燃やそうと
した。

「…あれ？この本の作者ケム・ザレオンだったんだ」
「嘘!?ほんとに!?!」

リオが呟いた名前にルーシイが凄い勢いで反応する。

「けむ……誰だ？」
「魔導士でありながら小説家だった人だよ」
「実はあだし、大ファンなの！作品全部読んだと思ってたけど、これつて未発表作ってこと!?!」

リオが分からないナツに説明し、ルーシイが興奮して捲し立てる。
リオは暇なときは家で本を読むこともあるためケム・ザレオンの事を
知っていた。

「はあく、読みたい気持ちはあるけど……しようがないか。ナツ、よろ
しく」

「おう♪」

リオは読みたい気持ちを我慢してナツに燃やすよう頼むがそれを
ルーシイが必死に止めて本を奪い取った。

「だ、ダメよ！これは文化遺産よ！燃やすなんてとんでもない！」
「職務放棄だ」

「うぐつ大ファンだつて言ってんでしょ!!」
「今度は逆ギレ」

ハッピーにグサグサと追いつめられるルーシイ。

「じゃ、じゃあ燃やしたってことにしといてよ…これはあたしが貰うからあ」

「駄目だよルーシイ」

「嘘はやだなあ」

「そんなあー」

ルーシイが涙目になっていると

「なるほどなるほど〜ボヨヨヨヨヨ」

エバルーの声がどこからか聞こえる。

「…下!」

「貴様らの狙いは『DAY BREAK』だったのか」

「ほらー、もたもたしてっから来ちまったじゃねえか」

「ご、ごめん…」

(この屋敷の床ってどうなってるの?)

リオの警告に飛び退くとエバルーが床下から飛びだしてきた。ナツの苦言にルーシイは謝るが、ハッピーはそんなことより屋敷の構造が気になっていた。

「フン! 魔導士共が何を躍起になって探しているかと思えば…」

「そんなくだらん本だったとはな!」

「え?」

「くだらん本?」

「人が書いた本を下らないってどういうこと?」

ルーシイが持っている本をくだらないと言うエバルーにリオたち

は首を傾げる。

しかし、くだらん本と聞いたルーシイは、

「じゃあ、この本貰ってもいいかしら？」

と言うが

「嫌だね、我輩の物は我輩の物」

「ケチ」

「黙れブス」

ルーシイはケチというが、エバルーまたブスと言う。それにルーシイは再び心にグサツと傷ついた。

ナツは掌に炎を灯した。

「燃やしちまえばこつちのもんだろうが」

「ダメツ！絶対ダメーツ!!」

さつきから駄々をこねるルーシイに流石に痺れを切らしたのかなツは真面目な顔をしてルーシイをキツと睨み、言い放つ。

「ルーシイ！仕事だぞ！」

「そうだよ。我慢しよ？ルーシイ」

リオもそれに便乗した。

「じゃあ、せめて読ませて！」

『此処でかい!!?』

ルーシイが急に座り込んで本を読み始めたのでその場の全員でツッコんだ。

「気に食わん！エラーい我輩の本に手を出すとは……！バニツシユブラザーズ!!」

エバルーがそう叫ぶと書庫の隠し扉が開いてそこから2人の男が現れた。

1人はバンドナをした背の高い男。もう1人は顔に『上』『下』『左』『右』の文字が書かれていて、大きなフライパンのような物を持っている男だった。

「グッドアフタヌーン」

「こんなガキ共が妖精の尻尾の魔導士とは、ママも驚くぜ」

「ハッピー、あの紋章って」

「あい！傭兵ギルド『南の狼』だよ!!」

「こんな奴等雇ってたのか？」

リオはハッピーに二人の兄弟の素性を確認してナツはバニツシユブラザーズを睨む。

「ボヨヨヨヨ!!『南の狼』は常に空腹なのだ！覚悟しろよ？バニツシユブラザーズよ!!あの本を奪い返して殺すのだ!!」

エバルーが得意げに笑った。

そこで、急に本を読んでいたルーシイが立ち上がり、ナツ達に叫んだ。

「ナツ、リオ！少し時間を頂戴。この本にはなにか秘密があるみたいなの……!」

「秘密？いいけど時間って、ちよつと！どこに行くの!？」

「どこかで読ませて！」

「はあ!!？」

ルーシイは部屋を出ていき、どこかで本を読むことにした。

（秘密だど？我輩は気付かなかったが、財宝の地図でも隠されているのか？）

エバルーはそう思案すると、床の抜け穴を使い、床下に沈み込んでゆく。その最中、バニツシユブラザーズに命令した。

「娘は我輩が捕らえる。小僧どもを消しておけ！」

「イエツサー！」

エバルーが沈んで行くのを見て、ナツとリオはそれぞれハッピーとルナに頼んだ。

「ハッピー。ルーシイを頼む」

「ルナもお願い」

「オイラ達も加勢するよ！」

「そうだよ！」

ハッピーとルナが勇ましく言うがリオとナツはそれを蹴った。

「いや」

「俺とリオだけで十分だ！」

「あ？てめえママに言いつけんぞ!!」

「落ち着け。クールダウンだ」

「ハッピー、行こ？」

「ナツ!!リオ!!気をつけてねー」

「さて、カモン、火の魔導士と水の魔導士」

「ん？」

「何で知ってるの？」

「バルゴを倒した時に足にそれぞれ火と水を纏ったろ」

「バルゴ……？ああ、あのゴリラメイドか」

「貴様らだろう？メイドどもを倒した輩は、メイドの服の一部が焦げ、一部は濡れていたからな。つまり、ユー達は能力系アビリティの火の魔導士と水の魔導士と見て間違いない」

「洞察力と想像力が優れてるね君…正直、舐めてた」

ちなみに能力系アビリティとはナツやリオのように魔法を身に付けた力の事。ルーシイのようにアイテムホルダーを使う魔法は所有系ホルダーと呼ばれる。ハッピーやルナの翼エーラの魔法も能力系アビリティである。

「じゃあ、覚悟はできてるってことだよなあ！」

ナツは癡猛に笑うと全身から炎を噴出させた。

「黒焦げになる、覚悟がなあっ!!」

「残念ながら火の魔導士は私の最も得意とする相手だ。それに水の魔導士とはいえ、魔導士相手なら私たち傭兵の方に旗があがる」

「ふーん」

魔導士VS傭兵

「どうやら妖精フェアリーテイルの尻尾の魔導師達は自分たちこそ最強か何かと勘違いしてるようだ」

「確かに噂は聞く。魔導士ギルドとしての地位は認めよう」

「だが所詮魔導士。プロの傭兵にはかなわない」

「だったら早くかかって来い」

「相手してあげるから」

リオとナツは傭兵二人に対して余裕な態度を崩していなかった。

「兄ちゃんコイツら完全になめてるよ」

「焦るな、相手が魔導士ならイージーなビジネスになりそうだ」

兄の発言を皮切りにバニッシュブラザーズが地面を蹴り一瞬で二人の前に移動した

「グボオアー！」

「くっ！」

ナツはフライパンのような武器に吹き飛ばされ、リオは弟に足を掴まれてそのままナツが飛ばされた方向に投げられた。そして扉をぶち破り、廊下に出ると

「はあっ！」

兄にフライパンで追撃してきた。それを躲して真ん中に鎮座していた悪趣味な大きい金のエバル像の舌に二人で降り立つ。

「ナツ！大丈夫？」

「おう！平気だ！」

そこへバニツシユブラザーズが廊下に出て来て、即座に対峙する。

「ユー達は魔導士の弱点を知っているか？」

「の、乗り物に弱いことか!？」

「それは俺たちだけだと思う…」

「兄ちゃんやっぱあいつらナメてるって」

リオとナツの会話に弟の額に青筋が浮かび、兄は呆れる。

「魔導士の弱点それは肉体だ!」

「肉体?」

そう言うと、バニツシユブラザーズは再び二人に攻撃をする。

「魔法とは、精神力を鍛錬せねば身に付かぬもの」

「結果…魔法を得るには肉体の鍛錬は不足する」

兄がフライパンでリオ達に攻撃するが、二人はそれを難なく躲したがエバル像の舌はポッキリ折れる。その後床に着地したりオに弟が追撃して殴りかかってきたが、リオはそれを躲す。

「魔法とは、精神力を鍛錬せねば身に付かぬもの」

「すなわち…日々肉体を鍛えている我らには」

「力もスピードも及ばない」

バニツシユブラザーズはそう言うとりオ達の前に着地する。

「昔、ミーたちの前に相手の骨を砕く魔法を習得した魔導士が現われた」

「俺たちはその魔導士と相手をし、呪いをかけるより早く…一撃で骨

を砕いてやった。奴が長年築いてきた物はたった一撃で崩れ落ちた。」

「それが魔導士というものだ」

「魔法がなければ普通の人間並みの力も持ってねえ」

兄弟は自分たちの経験を聞かせながらコンビネーションで攻め続けるがリオ達はそれを難なく躲す。

「ほくう、怖えなあ、で？いつになったら本気になんだよ？」

「散々何か言ってるけど全く攻撃当たってないよ」

ナツがバニツシユブラザーズに向き直って挑発し、リオも続けて煽る。

「なるほど、貴様らのスピードは認めてやる」

「兄ちゃん、あの技をやろうあれなら避けられねえ」

「合体技だ！」

「OK」

「？」

「俺たちがなぜバニツシユブラザーズと呼ばれているか教えてやる」

「消える、そして消すからだ」

バニツシユブラザーズの弟が、兄のフライパンに乗る。

「ゆくぞ!!天地消滅殺法!!!」

「はっ!!」

兄はフライパンを打ち上げ、弟は天井に向って飛び上がった。

リオとナツは飛び上がった弟を見ていたが、刹那兄がフライパンで

リオを殴りつけた。

「天を向いたら、地にいる!!!」

「ぐっ!」

たまらずリオは横に吹き飛ばされる。

「リオ!!」

ナツはリオの方に目を向くがその隙に弟が天から踏みつけた。

「地を向いたら、天にいる!!!」

「ふぼっ」

「相手の視界から味方を消し、敵を必ず葬り去る」

「これぞバニツシユブラザーズ合体技『天地消滅殺法』!!」

「これを食らって今まで生きてた奴はいな……」

バニツシユブラザーズが言い切る前にナツとリオはひょいっと立ち上がった。

「今まで生きてた奴は……」

「何?」

ナツとリオは平然としていた。

「バカな!」

「コイツら本当に魔導士か!」

「もういいや。これで吹っ飛べ!!」

「!」

ナツは二人との闘いに飽きたのか大きく空気を吸い込みブレスを放つ。

「火竜の咆哮!!!」

「来た!!火の魔法!!」

「終わった」

そう言う兄の方は、フライパンをひるがえしナツの炎を吸収する

「対火の魔導士……兼 必殺技!!!」

「フレイムクッキング火の玉料理!!!」

「!!」

「私の平鍋は全ての炎を吸収し、威力を倍増させて…噴き出す!!」

兄はフライパンを構えて吸収したナツのブレスをリオ達に放った。

「妖精の丸焼きだぜ!!」

「炎の魔力が強いほど自分の身を滅ぼす。グツバイ」

燃え上がる炎から、2つの人影が見えた。ナツとリオは健在だった。

「何!!!?」

「火が効かねえ!」

「ねえ、忘れたの?俺が水の魔導士だって」

リオはナツの前に立ち、両手を突き出していた。リオ達の前には大きな水の壁があった。

「海竜の城郭」

「ナイス、リオ!!」

「うわ——!!!?」

兄弟は驚愕していたが、その隙に二人は兄弟に向かって飛び出す。

そしてナツが兄の顔を掴み、リオが弟の顔を掴む。

「聞こえなかったか?」

「なら、もう一回言うね」

「吹っ飛べ!!!」

「火竜の翼撃!!!」

「海竜の波蝕!!!」

ナツトリオがそれぞれ炎と水の両腕を振り下ろす。

そしてその衝撃によりエバルーの屋敷の窓や壁などが全壊した

「何なんだ……この魔導士は……」

「ママ……」

二人はリオ達の強さに戦慄しながら気絶してしまった。

「やべ…やりすぎたかな？」

「はあ、また説教だね」

ナツは屋敷の惨状に苦笑いし、リオもため息をつきながらも苦笑いしていた。

「さーてルーシイを探しに行くか」

「そうだね、ハッピーとルナに任せるとはいえ心配だし」

「っーか何だったんだこいつら」

「だから傭兵だって」

「そうです…」

二人はこの後のことを話しながらルーシイを探しに行った。

しかしその時、倒されていた筈のゴリラメイドの目が突然光り始めた。二人はその事にまだ気づいていない。



「……………」

一方ナツ達の勝負が決着がつく少し前、ルーシイはエバルの屋敷の地下水路でケムザレオンが書いたという本『DAY BREAK』を眼鏡を掛けて読んでいた。

ルーシイが掛けている眼鏡は「風読みの眼鏡」という魔法アイテムである。この眼鏡を掛けて本を読めばモノによるが通常の2〜32倍の速度で読むことができるため、本好きの人には欠かせないアイテムなのである。

「ふうーっ ま、まさかこんな秘密があつたなんて……この本は燃やせないわ。すぐにカービィさんに届けないと」

ルーシィは本を読み進めていく内に本に書かれていた秘密を解き明かしたのだ。この本の本当の秘密を依頼主のカービィに届けようと立ち上がったその時、

「ボヨヨヨヨ……まさか貴様も風読みの眼鏡を持ち歩いているとは、主もなかなかの読書家よのう」

後ろの壁からエバルーの手が出てきた。

「やばっ」

出てきた腕はルーシィの腕を捕まえる。その拍子にルーシィは鍵を足下に落としてしまった。

「痛っ！」

「さあ言え！何を見つけた！その本の秘密とは一体なんだ！」

腕を捻られる痛みを耐えながらルーシィはエバルーを睨み付けながら言った。

「ア……アンタなんかサイテーよ……文学の敵だわ……」

エバルーに言ったその言葉は本をこよなく愛するルーシィだからこそ言える言葉であった。

DEAR KABY

「文学の敵だ?!?我が輩のような偉く〜く〜て教養のある人間に対して……」

「変なメイド連れてる奴が教養ねえ」

「我が輩のメイドを愚弄するでないわ!さあ言えどんな秘密だ!言わんとこの腕をへし折るぞ!」

エバルーはルーシイの腕を捻りながら折ると脅すが、ルーシイは負けじとエバルーに舌を出して挑発した。

「調子に乗るな小娘があ!その本は我が輩の物!すなわち秘密も我が輩の物なのじゃあ!」

エバルーはルーシイの態度に怒り、腕を折ろうとする。

腕からギシギシと音が鳴り、ルーシイも苦痛の表情を浮かべる。

しかし、ルーシイの腕を折ろうとしたエバルーの腕に、ハッピーとルナが蹴りを入れた。

「ハッピー、ルナ!!」

エバルーはルーシイの腕を離し、ルーシイは自由になった。

「ナイスハッピー、ルナ!カッコイ!!」

ハッピーとルナはルーシイに笑顔を見せた後、ルナは綺麗に着地したが、ハッピーは下水の中へと入っていった。

「ぬう、何だその猫どもは!?!」

「バツビイべぶる」

「ハッピーです、だつてさ」

「てか、あんた上がったきなさいよ」

「びぶ…びぼびいべぶる」(水きもちいいです)

「下水だよ?」

ハッピーに上がってこいとルーシイは言うが水が気持ちいいとブクブク言つて上がった来ない。ちなみにルナの言うとおり下水なのでとても汚い。

「形勢逆転ね、この本を渡すつて言うなら見逃してあげてもいいわよ」

「ボヨヨヨヨ、文学少女の割に言葉の意味を間違えておる。形勢逆転とは勢力の優劣状態が逆転することだ。たかが猫が2匹増えたぐらいで我が輩の魔法、『土潜』^{ダイバー}はやぶれんぞ!!」

「魔法だったんだねあれ」

「てゆーかエバルーも魔導士!?!」

ルナとハッピーは床を通り抜ける仕組みを考察しているとエバルーが襲い掛かってきた。

「この本に書いてあったわ。内容はエバルーが主人公の冒険小説。内容は酷いものだったの」

「我が輩が主人公なのは素晴らしいことだ。しかし内容はクソだ。ケム・ザレオンのくせにこんな駄作を書きおつて。けしからんわ!!」

「あんた、無理やり書かせといて何でそんな偉そうなわけ!?!」

「偉そう? 我が輩は偉いのじゃ! 書かぬという方が悪いに決まってる!」

「あんたが脅迫して書かせたんじゃない!!」

「脅迫?」

ルーシイが言ってることがいまいまだ分からないハッピーとルナは首を傾げたが、エバルーはさも当然のように言いつける。

「なにそれ?」

「偉——我が輩を主人公に本を書かせてやると言ったのにあのバカは断つたのだ。だから言っちゃったんだ。書かぬなら親族関係者全員の市民権を剥奪させてやるとな」

「えっ? 市民権を剥奪されたら商人ギルドや職人ギルドに加入できないじゃないか」

「あいつにそんな権限あるのー?」

ハッピーはエバルーがやろうとしたことに驚き、ルナはエバルーにそんなことが出来るのかと疑問に思った。

しかし、フィオーレ王国では封建主義の土地も残っているため、絶大な権力を持つ貴族もいる。そのため、エバルーでもそういったことは可能なのだ。

「結局奴は書いたが我が輩に逆らった罰として独房で書かせてやったよ!!ボヨヨヨヨヨ!!作家だとふんぞり返る奴の誇りを砕いてやったのだ!!」

「あんたがケム・ザレオンを独房に入れてた間の3年間、彼はどんな想いでいたか分かる!!」

「3年も……!?!」

エバルーの余りにも傲慢で自分勝手な考えについてルーシイの怒りは爆発し、叫ぶ。ハッピーとルナはその酷さに言葉を失った。

「そんなもの、我が輩の偉さに気づいたに決まっておる!」

「違う!自分のプライドとの戦いだった!書かなければ家族の身が危ない!でもあんたみたいな大馬鹿を主人公にした物語を書くなんて作家としての誇りが許さない!」

「貴様、なぜそこまで詳しく知っておる」

「この本に全部書いてあるわ」

エバルーは、自分の予想以上に事を深く知っているルーシイに対して、疑問を投げかける。するとルーシイは『DAY BREAK』を掲げて言った。

「あんだだっけ知ってるでしょ?ケム・ザレオンは元魔導士。彼は最後の力を振り絞ってこの本に魔法をかけた」

「ケム・ザレオンが残したかったのはあんたへの言葉じゃない。本当の秘密は別にあるんだから!」

「おおっ!!」

「だからこの本はあんたには渡さない!!てゆーか持つ資格なし!!開け巨蟹宮の扉…」

「キャンサー!!」

ルーシイも金の鍵を取り出して叫ぶと光に包まれ、鐘楼の音と共に出てきたのは二足歩行で人間の姿をしつつも背中から6本の蟹の足を生やした美容師風の姿をしている蟹の星霊だった。その両手には鋏が握られている

「なにっ!!?」

「蟹来た——!!!」

「蟹なのに何で人間なのー?」

キャンサーの登場により、ハッピーはテンションが上がり、ルナは何で蟹じゃないのか不思議に思った。

「カニだよね!? 語尾絶対カニだよね!」

「もしくはチョコキだったりしてー」

ハッピーとルナは語尾が何なのか期待していた。そして、キャンサーは口を開いた——。

「ルーシイ、今日はどんな髪型にするエビ?」

『エビ——!!!?』

「空気読んでくれるかしら!」

ちよつと斜め上の発言に皆びっくりした。

「戦闘よ!あの髭オヤジをやっつけて!」

「OKエビ」

「ルーシイ、オイラまさにストレートと思ったらフックを食らった感じだよ、うん!もう帰らせていいよ」

「せめてチョコキにしてよー。エビはないよー」

「あんたたちちよつと黙ってて!!」

ハッピーとルナの発言にルーシイは突っ込んでいた。

一方のエバルーはあの本の秘密が自分の今までの汚職であり、それが評議院所属の検証魔導士に知られたらマズいと焦っていた。

そしてエバルーは何とかするために懐からある物を取り出す。それは金色の鍵だった。

「開け!!処女宮の扉!!」

「え!」

「まさか、ルーシイと同じ魔法!!」

「エバルーも使えるの!」

「バルゴ!!」

エバルーは星霊の名前を叫ぶと魔方陣と共に鐘楼の音が響く。そして現われたのは――

あのゴリラメイドのバルゴだった。

「お呼びでしょうか？ご主人様」

「こいつ星霊だったのー？」

「ボヨヨヨ！さあバルゴ!!こいつらから本を……ん？」

「あっ!？」

そこに居る者達はバルゴの方を見て驚愕した。
なぜならバルゴの肩には――。

「ナツ!？」

「リオ!？」

2人が掴まっていたからだ。

「な、なぜ貴様らがバルゴと!？」

「あんた達、どうやって……?？」

「このメイドが動き出したからしがみついていたんだよ!」

「さつきまで玄関辺りにいたのにどうなってんの?」

「それはこっちのセリフよ!ってまさか!」

そこでルーシイは何か気付いたかのように硬直した。

「あんた達まさか星霊界を通って来たの!？」

「なんだと!あり得ん!」

星霊界。星霊達が普段居る此処とは別の世界のことである。普通の人間がその世界を通ることはまずありえないのだ。

「ルーシイ!俺たちは何すりゃいい!？」

「バルゴ!あいつらをやってっつけて本を取り戻せ!」

「ナツ、リオ!!そいつをどかして!!」

「おう(分かった)!!」

「どりゃあっ(せああっ)!!」

ナツトリオは即座にバルゴに鉄拳をかまして沈めた。

その内にルーシイは持つていたムチで、エバルーを捕まえる。

「これでもう、地面に逃げられないでしょー!」

そのままルーシイはキャンサーに向かってエバルーを放り投げ、キャンサーもハサミを使い、エバルーの毛をカットする。

「あんななんか、脇役で十分なのよ!!」

「ボギョオー!」

キャンサーが目にも止まらない速さでエバルーの髪をカットすると、エバルーの髪は一切なくなり、ツルピカになった。

「お客様こんな感じでいかがでしょうー!」

ナツトリオ、ルナとハッピーはルーシイに笑顔を向けてグツと親指を立てる。

ルーシイもそれに応えて笑顔で親指を立てた。



カービィ邸に着いたルーシイは本をカービィに渡す。それを見たカービィは激昂した。

「な、これは……! 依頼は本の破棄、または焼却だったはずですよ!」

「そうですね。破棄するのは簡単です。カービィさんにもできます」

「な、なら私がこの本を処分します! こんな本、見たくもない!」

ルーシイが依頼主と相対しているのでリオ達は黙ってそれを見ていた。

ルーシイはどこか寂しげに本を見る。

「どうしてカービィさんがその本の存在が許せないのか分かりました。父の誇りを守るため——あなたはケム・ザレオンの息子ですね」

「息子!?!」

「まじかつ!?!」

リオとナツは驚きが隠せず、ハッピーとルナも口を開けて呆然としていた。

ルーシイは話を続ける。

「この本を読んだことは？」

「いえ、父から聞いただけで、読んだことは…しかし読むまでもありません。駄作だ、父も言っていた」

「だからって燃やすなんて…」

「そうだぞ!! あんまりじゃねえか! 父ちゃんが書いた本だろ!!」

「待って二人とも! 言ったでしょ! 誇りを守るためだって!」

たとえ駄作でも父が書いた本を燃やそうとしていたカービイにリオとナツは怒りを隠せなかった。そんな二人をルーシイは必死に抑える。

メロンはポツポツと語り始める。

31年前のこと、エバルーからの脅迫によってデイ・ブレイクを書かされていたケム・ザレオンが3年振りに家に帰って来た。

そして家に帰るなり挨拶もなしにロープで腕を縛ると

「私はもう終わりだ。二度と本は書かん」

と言って利き手の右腕を斧で切り落としたそうだ。

そのまま病院に送られ、入院となったケム・ザレオンを若かりし頃のカービイは責め立てた。

その後すぐケム・ザレオンは自害した。

カービイはその後長らく、ケム・ザレオンを憎み続けていた。

「しかし、私の中の憎しみはいっしか後悔に変わりました……。私があんな事を言わなければ父は自殺しなかったんじゃないかと……」

言い終わるとカービイは懐からマッチ箱を取り出した。そして、

マッチに火をつける。

「待つて！」

しかし、突然本が輝かしく光り始めた。

の光と共に本が開かれ、中から無数の文字が飛び出す。

「え!？」

「なんだ!？」

「文字が浮かんだ・・・!？」

ルーシイを除いた全員が、その光景を呆然と見る。

ルーシイが再び口を開いた。

「ゲム・ザレオン：いえ、本名はゼクア・メロン 彼はこの本に魔法をかけたんです」

するとタイトルである『DAY BREAK』の文字が浮かび、並び替えられる。そして本当のタイトルとしてカービイの前に現れた。

『DEAR：KABY!？』

「彼のかけた魔法は文字が入れ替わる文字魔法の一種。もちろん、タイトルだけでなく中身も、です」

ルーシイがそう言うのと飛び出していた文字達が次々と並び替えられる。並び替えられた文字で語られる文はカービイに向けられた文だった。

「すげえ・・・」

「うん・・・」

「「きれー」」

リオ達は目の前の光景に感動していた。

「彼が作家を辞めた理由・・・それは最低な本を書いてしまった他に最高の本を書いてしまったことかもしれない」

ルーシイは続けた。

『DAY BREAK』から溢れた文字は次々と本に戻っていく。

「それがケム・ザレオンが本当に残したかった本です」

「父さん……私は貴方を……理解できてなかったようだ」

カービィは笑いながらポロポロと涙を流す。それはやつと父親に對して流すことができた涙だった。

父を抱きしめるかのようにカービィは『DAY BREAK』改めて、『DEAR KARRY』を抱き締める。カービィは涙を拭き、リオ達に身体を向ける。

「皆さん、ありがとうございます。やはりこの本は燃やせませんね」

「そつか……じゃあ、俺達は帰るわ」

「そうだね」

「あいさー！」

「おー！」

「えっ!？」

ナツはそう言うのとカービィに背を向け、出口に向かう。リオとハッピー、ルナもそれに続く。カービィとルーシィは戸惑うことしか出来なかった。

「ちよ、ちよつと待つて下さい……報酬を——」

「だって、依頼は『本の廃棄』ですよね？」

「俺たちは達成してねーしな」

「い、いや……しかしそういうわけには」

「いいんだよ！目的を達成してないのに報酬なんて貰ったら、じつちゃんに怒られちゃう」

ナツ達の慈愛に、またも涙が溢れそうになるカービィ

「ありがとうございます……ありがとう、妖精の尻尾」

「どういたしまして」

リオとルナがそう言うのと夫婦はより豊かな笑顔になる。

リオ達は手を振りながら屋敷を後にした。ルーシイも慌てて後を追いかけていった。

エピソード〜帰り道

その後ナツ達は帰り道に通る森の中で食料や近くの川で捕った魚で夕食を摂っていた。

「もうう!!200万チャラにするなんて信じらんない!!」

「だって、嘘ついてもらうのは嫌だしなあ」

「あいー!」

「嘘ついてもらったら妖精フェアリーテイルの尻尾の名折れだよ」

「そーだよルーシィ」

2人と2匹が言うことも的を得ているとルーシィも降参した。

「今頃、自分の本当の家で読んでるだろうな」

「そうだね」

「え? 本当の家って?」

ナツ達の会話に疑問が生じたルーシィは聞く。

「あいつらの匂いと家の匂いが違ったんだ」

「な、なにそれー!」

まさかのお金持ちじゃなかったことにルーシィはショックを受けていた。

「あの小説家、すげえ魔道士だな」

「あい、30年間も魔法が消えてないなんて相当な魔力だよ」

「昔は魔導士ギルドに所属していたんだって。そこで体験した冒険を小説にしているの。はあ、憧れちゃうな」

ルーシィはうっとりとした表情で、空を見上げる。

「ああ、やっぱりね」

「え? やっぱりって?」

「あのルーシィの部屋にあった紙の束、ルーシィが書いた小説だろ?」

「そうだったんだー?」

「やたら本に詳しい訳だね」

「あいー!」

ナツはニヤニヤしながら尋ねて、それ以外は本に詳しくあった理由を納得していた。

「ええ!？」

凶星だったのか顔が真っ赤になる。

「うう〜他の人には言わないでよ!」

「何で?」

「小説書くのは凄いいことじゃない。もっと胸を張っていいことだと思っ
うけど」

「まだ、下手くそだし…読まれたら恥ずかしいでしょ!」

「誰も読まないよ〜」

「それはそれでちよっぴり悲しい!!」

ルーシイは誰かに読まれることが恥ずかしいと言うがルナに誰も
読まないと言われてズーンと落ち込む。

そんなルーシイを見てナツだけじゃなく、リオとハッピー、ルナも
笑っていた。

「……ん?」

するとリオは今までの笑みから一転、目を鋭くさせた。

「どうしたのリオ?」

ルーシイはリオの突然の変化に戸惑うがリオは人差し指で静かに
するようにジェスチャーをする。

するとナツも何かに気付いたのかある方向に目を鋭くさせながら
睨み付ける。

「誰だてめえ!!」

咄嗟にナツは茂みの方に飛びかかる。しばらくするとナツ以外に
もう一人の男が姿を出した。

「グレイだ!!」

「なんでパンツ!？」

「グレイは服着てること自体が珍しいよ」

「うん」

現われたのは同じフェアリーテイルのグレイだった。しかし、なぜかパンツ一丁であったが常に脱いでる所を見ているリオ達にとってはもはや当たり前前の光景だった。

「トイレ探してたんだよ!!」

「こんな森にあるわけねえだろうが、この垂れ目野郎」

「てめえこそ、人のトイレタイムを邪魔してんじゃねえよ、このつり目野郎」

ナツとグレイは額をグリグリと押しつけながら互いの悪口を言う。しかし、そのどれもがレベルが低かった。

「子どもかっ!」

「「それがナツとグレイです」」

ルーシイはあまりのレベルの低さに呆れていたがそれ以外のメンバーはもはや当たり前前であるため慣れていた。

しばらくして、二人が落ち着いたためグレイも交えて夕食を摂るところになった。

「そういえばグレイはなんでここにいたの?」

「仕事の帰りにここを通る必要があったんだよ。マグノリアまで行くにはこの森が近道だからな」

「じゃあ早く帰れよ」

「当たり前だ。早く帰んねえとヤバイからな」

「何がヤバイの?」

「……エルザが帰ってくる」

グレイの情報にリオはへえーと呟き、ナツはゲツと表情を歪めていた。

「エルザってもしかして!」

「あい!妖精フェアリーテイルの尻尾最強って言われてる女魔導師だよ」

「すごい!会いた〜い!でも、エルザって雑誌とかに写真全然出ないけどどんな人なの?」

「『怖い』」

「はあ？」

リオとルナを除く3人の一言にルーシイは目が点になった。

「野獣？」

「ケダモノ？」

「もはや魔物だね」

ルーシイは3人が話すエルザの内容から、街を歩くだけで破壊するような怪獣を想像していた。

ナツ達はさらに想像を膨らませて山を2、3個蹴り飛ばすと言っている。

「3人とも、エルザが聞いてたら殺されるよ」

「そーだよ」

リオとルナはやんわりと反論するが、ナツ達には届いていなかった。

「結局、エルザってどんな人なの、リオ？」

「うーん……一言で言うなら妖精の尻尾フェアリーテイルの風紀委員って感じかな？」

「風紀委員？」

「うん。エルザは規律に厳しいから問題ばかり起こす皆に注意するんだ」

「特に問題を起こした人には説教と折檻があるからね。ナツとグレイは一番エルザにやられているから2人にとっては天敵みたいな人なんだ」

「へー」

ナツ達とは違った紹介にいよいよどんな人か分からなくなったルーシイは会えば分かるかと考えるのをやめた。

「とにかく早く帰んねえと」

「やべえ！早く行こうぜ」

「でも夜も遅いから明日朝一に帰ろう」

リオの提案に賛成した一同は夕食を早く食べ終わらせてからすぐに寝た。

一方とある街では注目を浴びている1人の女がいた。

彼女は鎧を身に纏っており、綺麗な緋色の髪がとても目立っていた。

なにより注目すべきなのは彼女が片手で持ち上げている物だ。それは何かの魔物の角なのだろう。しかし、その大きさは彼女の何倍もあつた。

彼女の名前はエルザ・スカーレット。フェアリーテイル妖精の尻尾の中でも最強と言われている女魔導士である。

リオ達の冒険はまだ始まったばかり。これから先、彼らの新たな冒険が幕を上げる。

緋色の女魔導士

「う〜ん…」

カービイの依頼を終えて数日後、ルーシイは今日もギルドのクエストボードに張られている依頼書を見ていた。

「魔法の腕輪探しに呪われた杖の魔法解除… 占星術で恋占い希望!? 火山の悪魔退治!?!へえ〜…魔導士の仕事って色々あるんですね」

「気に入った仕事があつたら言つてね。今はマスター定例会に行つてるから」

様々な依頼内容に感心しているルーシイにミラが近づいて告げる。

「定例会?」

「地方のギルドマスターたちが集まって定期報告をする会よ。評議会とは違うんだけど、う〜ん…リーダーズ、ヒカリペン光筆貸してくれる?」

「ウイ」

ミラは絵を描いてる大柄の男、リーダーズから、ヒカリペン光筆を借り、空中に分かりやすく図を書いて説明を再開した。ヒカリペン光筆とは魔法アイテムの一つであり、空中に文字が書けるペンである。ちなみに書ける色は7種類ある。

「魔法界で一番偉いのは政府との繋がりもある評議員10人。魔法界における全ての秩序を守るために存在しているの。犯罪を犯した魔道士をこの機関で裁く事ができるのよ。そしてその下に居るのがギルドマスター。評議会での決定事項を通達したり、各地方のギルドとの意思伝達を円滑にしたり、私達をまとめたり… まあ大変な仕事よね?」

「へえー、ギルド同士の繋がりがあるなんて知らなかった。」

ミラからギルドの組織について詳しく聞いているルーシイは今まで知らなかったことに興味を持っていた。

「ギルド同士の連携は大切よ? これをお粗末にしてると…」

「？」

「黒い奴等が来るぞオオオ」

「ひいいいっ!!!」

ミラから説明を受けていたルーシイの背後から、指に火を灯して地の底から這い出るように低くした声でナツが脅かした。いきなりのことのでルーシイは思わず悲鳴をあげてビビる。

「うひゃひゃひゃ!!! 『ひいいい』だってよ なーにビビってんだよ!!!」

ルーシイの反応にナツは腹を抱えて爆笑する。

「もお!! 脅かさないでよお!!」

汗をかきながら言う。

「ビビるルーシイ。略してビビルーシイだね！」

「略すな！」

「ナツく、女の子を脅かしちゃ駄目だよ」

「でもね、黒いヤツらは本当に居るのよ？ 連盟に属さないギルドー……闇ギルド」

「あいつ等法律無視だからおっかねーんだ」

「あい」

「暗殺に強盗なんでもやるからね」

「へえー、あんたもいつかスカウトされそうね」

ルーシイは呆れつつナツの方を見ながら言う。

「つーか早く仕事選べよ」

「前はオイラたちが先に決めちゃったから今度はルーシイの番だね」

「冗談!! リオやルナはともかく、あんた達とは解消に決まってるでしよ」

「何で？」

「あい？」

「当たり前でしょ？」

「あんなことしてなんでそんな顔で聞けるんだろ……？」

ナツとハッピーはなんでそんなことを言うのか分からないという

顔をしており、そんな二人にリオとルナは呆れていた。

「だって、リオやルナは知らなかったからまだよしとして、あんた達金髪なら誰でもよかったんでしょ？」

「何言ってるんだ？その通りだ！」

「ホラ——!!」

「でも、ルーシイを選んだんだ！いい奴だから！」

笑顔でストレートにそんなことを言うナツにルーシイは少し頬を赤らめて何も言い返せなかった。

そこに二人の男、グレイとロキが近づいてきた。

「なーに無理に決めることはねえさ、聞いたぜ大活躍だってなきつとイヤって程誘いが来る」

「ルーシイ、僕と一緒に愛のチームを作らないかい？今夜二人で」

「イヤっ」

「南の狼二人にゴリラ女を倒したんだろ？すげーや実際」

「それリオとナツよ」

「てめえかこの野郎!!」

「文句あつかあおお!!」

ルーシイのことを褒めようとするグレイだがそれがナツのことだと知るとナツの胸ぐらを掴んで文句を言う。それに負けじとナツもグレイに突つかかる。

「グレイ、服」

「ぬおおおおっ!!また忘れたあつ!!」

そしてグレイは下着一枚になっている。リオなど他の人に指摘されてから気付くほど、もはや癖になっている。

「うぜえ」

「今うぜえつつたか!?このクソ炎!!」

「超うぜえよこの変態野郎!!」

そしてまたいつものように喧嘩を始める二人。ロキはそんな二人

を無視してルーシイをナンパしていた。

「君ってホントに綺麗だよ、サングラスじゃなかったら目が潰れちゃってたなハハハ」

「潰せば？」

「でもロキ、ルーシイは星霊魔導士だよ」

「!?ルーシイ！君は星霊魔導士なのかい!?なんたる運命のイタズラ！すまない！僕たちはここまでのようだ！」

さつきまでルーシイの辛辣な言葉にも笑顔で躲していたロキがルーシイの腰にぶら下がっている星霊魔導士が持つ鍵とルナの一言にあからさまな動揺を見せていた。

「いきなりどうしたの？」

「ロキは星霊魔導士がなぜか苦手なんだ」

「きつと昔、女の子がらみで何かあったのよ」

リオとミラはロキの急な変化にそんな事を言う。

すると入り口の方へと走っていったロキがこちらに戻ってきた。戻ってきたロキはかなり焦りの表情を浮かべていた。

「ナツ!!!グレイ!!!マズイぞっ!!!」

「あ?」

同時に言うナツとグレイにロキは一息つくど、短く告げる。

「エルザが帰ってきた!!!」

「あ!!!」

その直後のギルドの反応は、戸惑いと恐怖に占められていた。やがて足音が聞こえ誰かがやって来た。そこには鎧を纏い、モンスターの角らしき物を背負っていた、緋色の髪の女性がいた。

「オレ…帰るわ…」

ロキはゆっくりとその場を後にしようとする。

ルーシイも女性を見ていた。

彼女こそエルザ・スカーレット、フェアリーテイル妖精の尻尾最強の女魔導士である。

「今戻った。マスターはおられるか？」

エルザはデカイ角を降ろす。

「お帰り!!マスターは定例会よ」

ミラは笑顔で言う。他の奴等はビビってるのにミラだけは笑顔だ。
「そうか」

「ところでエルザ：そのでかい角は何？」

全員が気になっているであろうばかデカイ角。そのことについて聞いたのはミラと同じくビビってないリオだった。

「リオ、これか？討伐した魔物の角だ。地元の者が土産にと飾りを施してくれてな…。迷惑だったか？」

「うん、迷惑ではないけどそこにあると誰かが壊しそうだから外に飾った方がいいと思う。」

「ふむ、それもそうだな…。とりあえず移動させておこう」

エルザが角を持ち上げて移動するのを見てギルド内の全員がリオがいて良かったと安堵の息を吐いていた。一方のルーシイは周りの評価とは違ったイメージで困惑していた。

「ねえハッピー、あの人がエルザさん？」

「あい！とっても強いんだ」

「それよりも、それよりお前達、また問題ばかり起こしているようだな。仕事先で何度も話を聞いたぞ…。マスターが許しても私は許さんぞー！」

エルザがそう言うのと全員がギクリとイタズラがバレた子どものような表情を浮かべた。

「カナ、なんとという格好で飲んでる。ちゃんと服を着ろ」

「うっ」

「ビジター、「ハイ」踊りなら外でやれ。ワカバ、「ギクツ」吸殻が落ちてる。ナブ、「うっ」そろそろクエストボードの前をウロウロせず仕事に行け」

フェアリーテイルのメンバーがエルザのことを恐れているのはこれが原因なのだ。彼女はとても厳しい性格でいつも問題を起こしているメンバーを注意しており、全員がその説教とその先の制裁を恐れ

ているのだ。

「マカオ」

「は、はいー!」

「はあ」

「なんか言えよ!?!」

ハコベ山のことを聞いていたのだろうがロメオのためにもしたと言える出来事なのでエルザも強く言うつもりはないようだ。しかし、ロメオに心配を掛けたとして言おうとしたが止めたようだ。

「まったく…世話が焼けるな。今日のところは何も言わずにおいてやろう」

随分色々と言っていたような気がするが、そこは声に出さずに心に留めておこう。ルーシイはそう決めた。

「風紀委員か何かで…?」

「それがエルザです(だよ)」

ルーシイの疑問にハッピーとルナが揃って答える。

「ところで、ナツとグレイは居るか?」

「こちらです」

エルザの問にまたも揃って答えるハッピーとルナ。

二人の指さす先には

肩を組んで大量の汗をかきながらガタガタ震えているナツとグレイの姿があった。

「や、やあ、エルザ…今日も俺たち、仲良くやってる…ぜい…?」

「あゝい」

「ナツがハッピーみたいになったあ!?!」

ついさつきまでレベルが低いとはいえ喧嘩をしていた二人が仲良しアピールをしている異様な光景よりも、ハッピーの物真似のような返事をしているナツの方がルーシイにとって衝撃だった。

「そうか…親友なら時には喧嘩もするだろう。しかし私はそうやって仲良くしているところを見るのが好きだぞ」

「いや…俺達別に親友って訳じゃ…」

「あい」

「こんなナツ見た事ないわ…」

今まで見てきたことのないナツの姿を見て気持ち悪いと思いがらもなぜこんなにも怯えているのか分からなかった。

「ナツは昔ケンカを挑んでボコボコにされちゃったのよ」

「あのナツが!!？」

「そしてグレイは裸で歩いてるところを捕まってボコボコに」

「まあ、自業自得だね…」

「そしてロキはエルザを口説いて半殺しに」

「……………」

ミラとリオは笑って話していたが、ルーシイにとっては余程驚愕の事実だったのか表情にでていた。

「お帰りエルザ。今日は早かったんだね」

「ああ、少し気になることがあってな早めに帰ってきたんだ」

「リオはエルザさんのことを怖がってないんだね」

「あい！リオは他の皆と違って問題行動を起こさないからエルザも怒らないのです」

リオがエルザと普通に話している理由を聞いてルーシイは一人納得しているとエルザが途端に真面目な表情になって話を切り出してきた。

「ナツとグレイ、そしてリオ、3人に頼みたいことがある。先ほどリオにも言ったように気になることを聞いてしまった。本来ならマスターの判断を仰ぐところのだが、早期解決が望ましいと私は判断した。3人の力を貸してほしい。ついてきてくれるな?」

その言葉に二人だけでなく、ギルド内の全員が驚愕した。

「ど…どういふこと!？」

「エルザが誰かを誘うのなんて初めて見たぞ」

「俺はいいよ。丁度仕事がないところだったし」

「ありがとう、リオ。出発は明日だ、用意しておけ、詳しくは移動中に

話す」

「いやっ！」

「行くなんて言ったかよ!？」

ナツとグレイの抗議は聞かずにエルザはギルドから出て行った。

「…エルザとりオ、ナツにグレイ…今まで想像したことなかったけど

…これってフェアリーテイル最強チームかも…」

「え!？」

ポツリ、と呟くミラジェーンの言葉に驚くルーシイであった。